

あおき  
**櫛 第 2 遺 跡**

地域自治区櫛事務所建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2008

宮 崎 市 教 育 委 員 会

あおき  
**櫛 第 2 遺 跡**

地域自治区橿事務所建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2008

宮 崎 市 教 育 委 員 会



柏第2遺跡空中写真1





植第2遺跡遺構分布狀況

## 序

宮崎市は、太陽と緑豊かな宮崎県の県都として、日々発展を続けております。市内各地では、今日も様々な開発事業が行われていますが、それに伴い遺跡の発掘も行われ、先人達の生活を物語る遺物が発見されています。

今回調査されました櫛第2遺跡は、宮崎市北部の海岸沿いにあります。櫛地区は、近年、住宅地としての開発が急速に進んでいるところですが、一方では、弥生時代の遺跡として名高い櫛遺跡や、櫛1号墳もあり、古い時代から人々の生活の痕跡が見られる、歴史豊かな地区でもあります。櫛第2遺跡は、それらの遺跡に隣接したところにあり、調査でも、古代に作られた大小の溝や竪穴住居、掘立柱建物などが発見されたほか、多くの遺物も出土いたしました。

この地に生きた先人達は、現在のように複雑かつ多忙な生活ではなかったと思いますが、反面洪水や日曜などの自然災害が襲う度、生命の危険と闘っていたことでしょう。私達は、そうした先人達を偲びながら、彼等の記録を後世に受け継ぎ、未来への糧としてゆかねばなりません。

調査は、5月から8月に実施されました。調査に従事された方々におかれましては、梅雨や、夏季の暑い盛りの作業は大変でしたが、このたび報告書を刊行することができましたのも、皆様のご協力の賜物です。末尾ではございますが、調査に従事された作業員の皆様に、心から感謝申し上げます。

平成20年3月

宮崎市教育委員会  
教育長 田 原 健 二

## 例　言

1. 本書は、地域自治施設建設に伴う、宮崎県宮崎市吉村町甲に所在する概第2遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は宮崎市教育委員会が平成18年5月19日～平成18年8月26日までの期間実施した。

### 調査組織

調査主体 宮崎市教育委員会

(平成18年度)

文化振興課 課長 野田 清孝

調査総括 文化財係長 山田 典嗣

調査事務 赤嶺 陽子(地域コミュニティ課)

調査員 主任技師 金丸 武司

技師補 河野 雅人

嘱託 萩木 浩一

島井 伸幸

整理担当 主任技師 金丸 武司

補助員 嘱託 永友 加奈子

稻元 久美子

徳丸 理奈

3. 掲載した図面のうち、現場における実測は金丸・萩木・島井が、遺物の実測は金丸・永友・徳丸・稻元が分担して行った。
4. 現場及び遺物の写真撮影は金丸・島井が行った。
5. 航空写真については有限会社スカイサーベイ九州に撮影を依頼した。
6. 本書で使用する遺構略号は以下のとおりである。  
SA：堅穴建物 SB：掘立柱建物 SC：土坑 SE：溝状遺構 SZ：不明遺構
7. 本書で使用する北は、全て磁北である。
8. 本書の執筆・編集は金丸が行った。
9. 遺跡の調査及び本書の執筆に際しては、宮崎市文化振興課の協力を賜った。
10. 出土遺物及び掲載図面・写真等は宮崎市教育委員会で保管している。資料の閲覧・利用等に関しては、事前に宮崎市教育委員会までお問い合わせいただきたい。

# 目 次

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境	
第1節 遺跡周辺の立地	1
第2節 歴史的環境	1
第Ⅱ章 調査の結果	
第1節 調査に至る経緯	4
第2節 調査の概要	4
第3節 層序	4
第4節 検出遺構及び出土遺物	9
第Ⅲ章 調査の成果	
第1節 検出遺構の性格について	27
第2節 出土遺物について	27
第3節 遺構内の土層堆積と遺構の構築時期について	28

## 挿図目次

第1図 標第2遺跡周辺地形図	2
第2図 標第2遺跡周辺図	3
第3図 標第2遺跡土層柱状模式図	6
第4図 上層遺構分布図（上層）	7
第5図 下層遺構分布図（下層）	8
第6図 SA01実測図	9
第7図 SB01、02実測図	11
第8図 SB03、04実測図	12
第9図 SB05、06実測図	13
第10図 SB07実測図	14
第11図 SC01実測図	14
第12図 SE01内出土遺物実測図	15
第13図 SE08及び遺構内出土遺物実測図（1）	17
第14図 SE08内出土遺物実測図（2）	18
第15図 SE08内出土遺物実測図（3）	19
第16図 SE10内出土遺物実測図（1）	20
第17図 SE10内出土遺物実測図（2）及びSE11内出土遺物実測図	21
第18図 SZ01及び遺構内出土遺物実測図	22
第19図 SZ02実測図	23

第20図 遺物包含層内出土遺物実測図（1）	25
第21図 遺物包含層内出土遺物実測図（2）	26

#### 挿表目次

表1 出土土器観察表（1）	30
表2 出土土器観察表（2）	31
表3 出土土器観察表（3）	32
表4 出土土器観察表（4）	33
表5 出土土器観察表（5）	34
表6 出土土器観察表（6）	35

#### 図版目次

図版1～4 調査区近景	37
図版5～36 調査区及び遺構写真	39
図版37～77 遺物写真	45

# 第Ⅰ章 はじめに

## 第1節 遺跡周辺の立地

櫛第2遺跡は、宮崎市吉村町江田原甲、新別府川河口付近の左岸に所在する。

新別府川の河口から石崎川河口は、砂丘が何列にもわたって日向灘に平行して形成される。最も西に位置し、新別府－波島－村角－島之内－片瀬原へ延びる第1砂丘、山崎街道沿いに伸びる第2砂丘、一つ葉有料道路の西側に伸びる第3砂丘、最も東に位置し、現海岸線に隣接する第4砂丘がそれである。新別府川は、宮崎平野を流れながらこれらの砂丘を南に迂回するよう向きを変える。砂丘の間は、流れを失った水が湿地を形成する。現在、宅地は砂丘に集中する一方で、砂丘間は水田として利用されている。

新別府川の右岸に広がる低地には水田が広がる。更に南は僅かに標高が高くなり、主に宅地として利用されている。

櫛第2遺跡は、第1砂丘の南端部に位置し、砂丘の尾根から南側へ向かう、標高5～6mの傾斜地上に形成される。地元の方の話によると、調査区はかつて標高が川面と大差なく、大雨の度に浸水していたが、昭和49年に行われた新別府川の河川改修工事の結果、川底が深掘りされたほか、調査区内も大量の土が盛られ、現在の地形が形成されたという。その後民間企業の資材置き場となり、近年では荒蕪地であった。

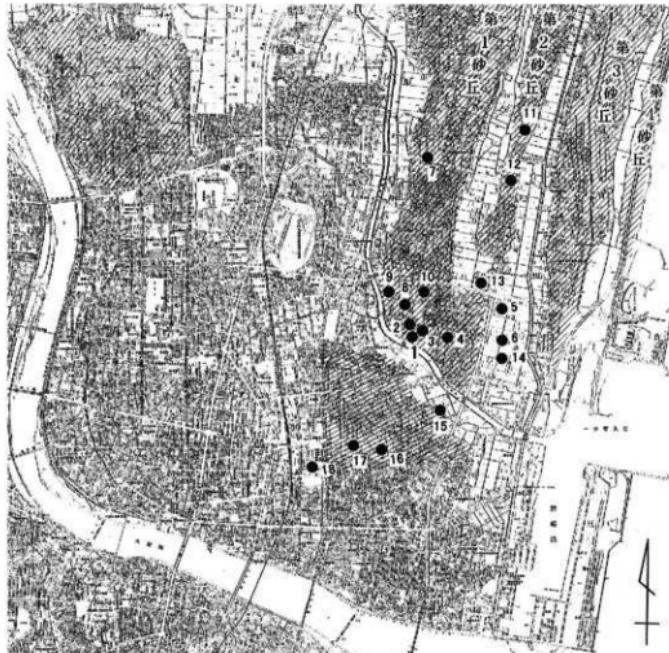
## 第2節 歴史的環境

櫛第2遺跡の周辺は、遺跡が多数分布する。まず、櫛第2遺跡の立地する砂丘の尾根上には終戦直後に調査された櫛遺跡がある。小児用甕棺が検出されるなど、県下では数少ない弥生前期の遺跡として知られている。また隣接地には、倒卵形の後円部もつ墳長52.5mの前方後円墳である櫛1号墳が立地し、近年では宮崎大学による発掘調査も行われた。日向地誌には、この地に藤原（平）景清が居を構えていたという伝承が記されている。これは宮崎平野の各地に残される景清伝承の類であろうが、宮崎県史蹟調査には「其西方畠地を隔てて赤焼土器の破片及多数の繕變せる輕石粘土等の散乱せる地點あり、そして発掘して上古の窯跡なりと稱せられる。」とあり、本遺跡を含む櫛1号墳西側一帯は古くから遺物の散布地であったことを窺わせる。櫛地区には、このほか櫛2号墳や櫛3号墳も分布しており、古墳群を形成する。この他、第1砂丘上には北に萩崎第1・第2遺跡が、南に江田原第1・第2・第3遺跡が立地し、それぞれ古墳時代～古代の遺構、遺物が確認されている。一方、第2砂丘は弥生時代中～後期の居住、埋葬に関わる遺構が検出された石神遺跡、弥生時代から古代に至る集落跡である猿野遺跡、古代の水田跡である櫛北小学校校庭遺跡が立地する。また、第2砂丘の東側は遺跡の分布が希薄であり、先に紹介した古墳が散見される程度であるものの、近年調査された池開・江口遺跡からは溝状遺構や掘立柱建物、井戸などが検出され、宮崎市としては数少ない、中世の居館跡であることが明らかとなった。

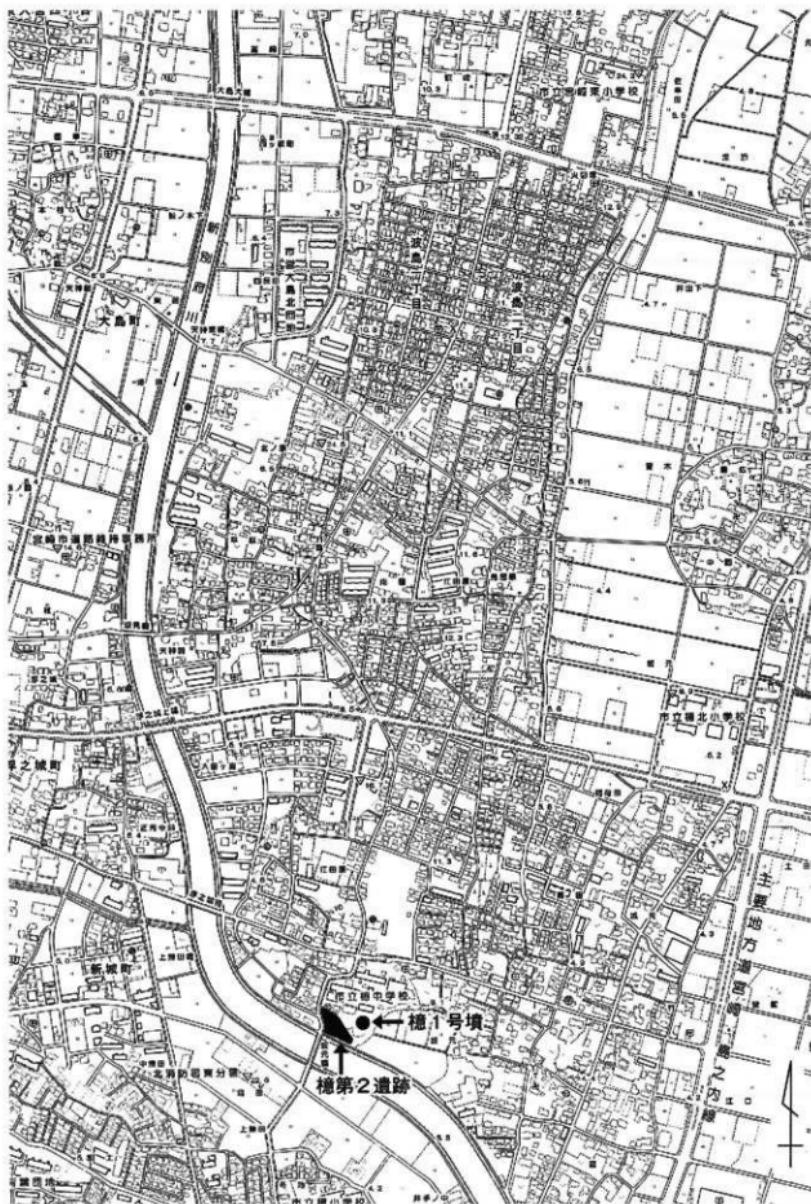
新別府川右岸の微高地には、北東端部に古墳時代中～後期の集落や溝状遺構が検出された北中遺跡が立地する。中央部には、弥生～古墳時代にあたる竪穴建物、掘立柱建物、溝状遺構、周溝状遺構、地下式横穴墓が密集状態で検出された大町遺跡や古代の遺跡である宮脇遺跡が分布する。更に西側には、夥しい量の土師器が出土し、宮崎県央部における古代遺跡調査の先駆けとなった淨土江遺跡が立地する。

樺第2遺跡周辺の遺跡分布を概観すると、新別府川左岸における居住地は砂丘上に偏っており、右岸は、微高地を居住地としたと考えられる。稲作普及以降、低地は水田や墓域として利用されることはあっても、中世までは居住地として活用されることは少なかったと考えられる。これは、当時くり返し訪れたであろう洪水等の自然災害を避けるためだったと考えられる。そして、この土地利用の傾向は、現代においても変わらない。

- 1 樺第2遺跡
- 2 樺遺跡
- 3 樺1号墳
- 4 樺2号墳
- 5 樺3号墳
- 6 樺古墳
- 7 萩崎第2遺跡
- 8 江田原第1遺跡
- 9 江田原第2遺跡
- 10 江田原第3遺跡
- 11 石神遺跡
- 12 鶴野遺跡
- 13 樺北小学校校庭遺跡
- 14 池開・江口遺跡
- 15 北中遺跡
- 16 大町遺跡
- 17 宮脇遺跡
- 18 淨土江遺跡



第1図 樺第2遺跡周辺地形図 (S=1/50,000)



第2図 穂第2遺跡周辺図 (S=1/2,500)

## 第Ⅱ章 調査の結果

### 第1節 調査に至る経緯

平成17年9月14日、市役所市民部より、来年度事業の予定地内における遺跡の有無について照会があった。そのうち地域自治区櫛事務所の予定地は、周知の遺跡である櫛遺跡の範囲内に含まれていたことから、平成18年1月24日に遺跡の有無を確認するための試掘調査を行ったところ、1m以上に達する客土の下層より、溝状遺構、柱穴等の遺構や、遺物包含層の堆積を確認し、開発にあたっては事前に発掘調査が必要であると判断した。この結果を受けて、遺跡の取扱を巡って市民課と文化振興課で協議を行ったが、少なくとも建物部分の現状保存は不可能との結論に至った。その後、本調査を前提として2月7日に確認調査を行ったところ、試掘調査で確認された溝以外に、堅穴住居も1軒検出された。これらを参考に、平成18年度に新設された地域コミュニティ課の協力の下、5月22日から8月25日まで発掘調査が行われた。調査面積は1360m<sup>2</sup>である。

### 第2節 調査の概要

調査は、廃土置き場と駐車場を確保するため南北に二分し、重機によりⅡ層まで除去した後に、人力により遺構検出・調査を行った。

北部では、試掘調査で確認できなかったⅢ～V層の残存部分を確認した。この層からは多くの遺物が出土したほか、VI層上面において、高原スコリアを埋土とする溝や堅穴住居等も検出された。またVI層除去後、VII層上面において、VI層を埋土とする掘立柱建物等の遺構を確認したことから、これを2枚目の遺構検出面と判断した。

南部では、規模の大きい溝や掘立柱建物群が調査区内で検出された。既にⅦ層上部まで削平されていたため、複数の遺構検出面は検出できなかったが、検出遺構の埋土に違いが認められたため、北部同様、複数の時期に跨って遺構が構築されたと考えられる。

### 第3節 層序

調査区内の土層堆積を模式化したものが第3図である。以下、層毎に説明を行う。

#### I層

バラスや腐植土に加え、Ⅱ層の砂や宮崎層群の岩塊で構成された表土である。調査区全面にわたって、ほぼ水平に堆積が確認された。深さは約15cmである。全面が硬くしまっている。

#### II層

砂と宮崎層群の岩塊によって構成された搅乱層。調査区の北端部を除いて、ほぼ全面から確認された。堆積は深く、1～1.2mに達する。また、I層とⅡ層の境界からは、大小の搅乱層が認められた。層中には、住宅建材、水道管、鉄釘、ビニール、プラスチック容器、空き缶、ガラス等の生活廃棄物が多く混入しており、戦後に堆積した層と考えられる。

### III層

細粒の黒褐色土。II層堆積時の搅乱の影響を受けなかった北端部より、帯状に確認された。本来調査区全体に堆積していたと考えられるが、厚さは東側が60cm程度であるのに対し、西側は30cmと、大きな違いが認められる。層は軟質である。

### IV層

細粒の暗褐色土である。III層同様、北端部より帯状に確認されたが、本来は調査区全体に堆積していたと考えられる。層はやや硬くしまっている。この層は、以下の三層に分層が可能である。

#### IVa層

IV層の中では茶褐色がかっている。層は色調・粒子とも安定している。堆積も、ほぼ20cm程度と水平であるが、東側では50cm程度と分厚くなる。層中には、高原スコリアの粒子が二次堆積状に混入する。また、3mm大の砂粒や、焼土の粒子が少量含まれる。粘性はない。

#### IVb層

中央部のみ堆積を確認できた層である。堆積は15cm程度である。層の色調はIVa層と同じだが、濃淡が明確にあり、VI層のブロックも認められるなど安定しない。層中には5cm～粒子大の焼土が多く混入していた。また指先大以下の炭も多く混入していたため、遠目ではIVa層よりも暗い色調に見える。また、土師器、須恵器、弥生土器の混入も多かった。

#### IVc層

東よりの一部にのみ確認された層である。IVb層より焼土のブロックは少なく、焼土粒子もやや少なめだが、炭の混入は調査区中部を中心に著しく混入する傾向が認められる。

### V層

高原スコリアを多量に含む暗褐色土である。III・IV層同様、北端部の一部を残し大部分を失っているが、層の堆積は東端部では15cm程度と明瞭だが、中央部以西では遺構内で認められるのみである。粘性はなく、軟質である。

### VI層

細粒の黒褐色土である。III・IV層同様、北端部より確認されるが、東部においては以下の二層に分層が可能である。

#### VIa層

北端部の一部を残し大部分を失っているばかりでなく、中部においては部分的な消失も認められたが、北東部ではII層の下位から安定した堆積を確認できた。層は厚さ15～30cm程度であり、色調は安定し、硬くしまっている。層中には大粒の砂粒が少量混入する。遺物の混入はごく少量である。

#### VIb層

VIa層の下位、特にVa層消失部分において認められる。VIa層より僅かに明るく、層中に斑紋が認められる。厚さは10cm前後であるが、東側を除いて堆積は認められない。

#### VII層

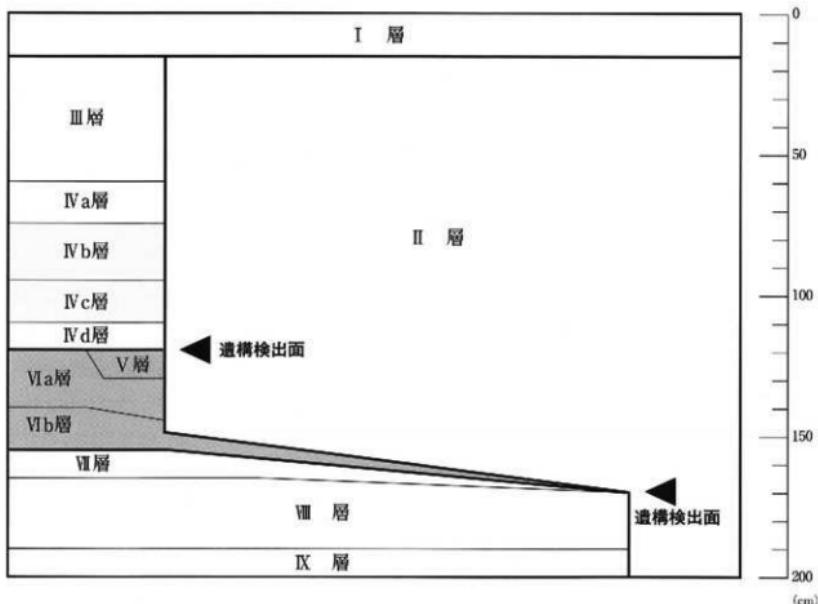
黄褐色シルト質土。大変硬くしまっており、粘性に富む。調査区北部全体に20cm程度の堆積を確認したが、南部は確認できなかった。II層による削平の影響も考えられるが、遺構の残存状況を考えると、南側においては本来堆積が薄かった可能性が高い。

#### VIII層

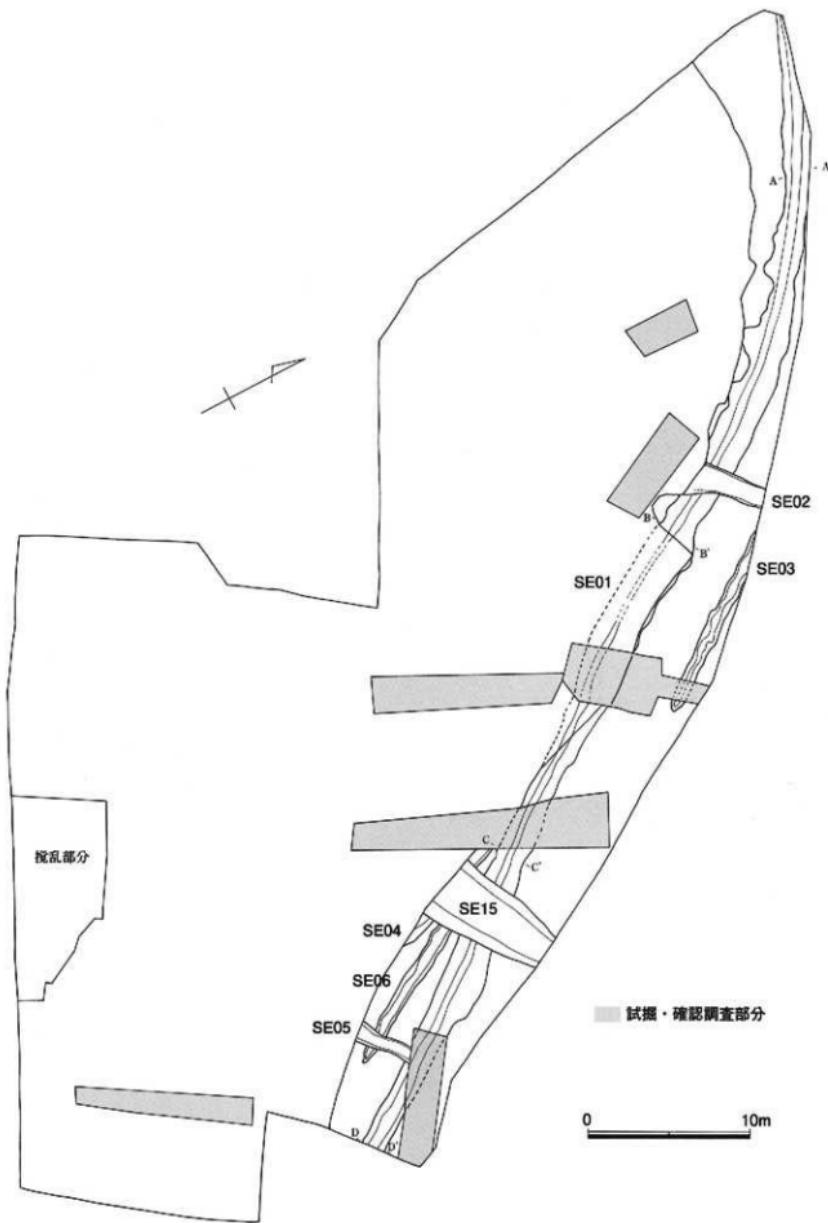
青白色粘質土。宮崎層群中の粘板岩に相当する。通常硬くしまっており、日光に晒されるとひび割れが顕著である。調査区南部全体に30cm程度の堆積を確認したほか、北部でも10cm程度の堆積を確認した。

#### IX層

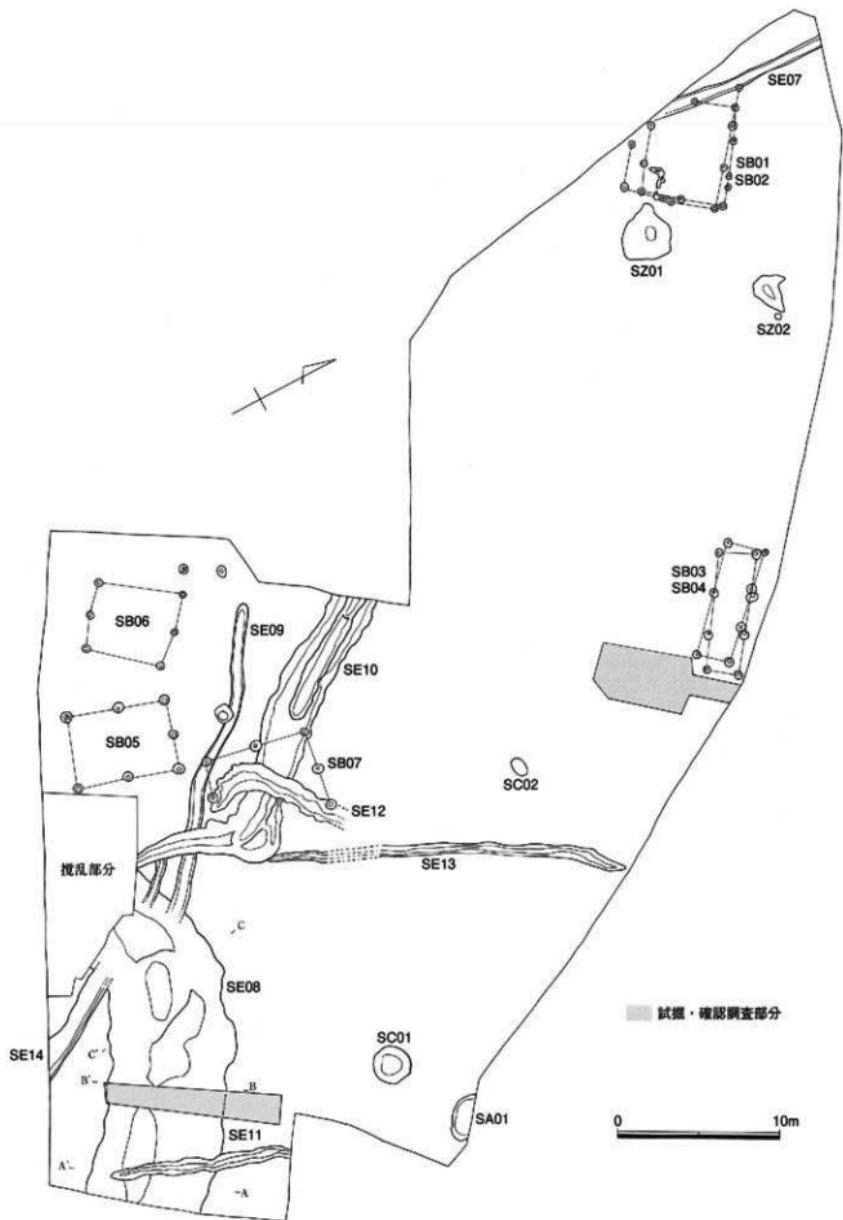
青灰色砂質土。宮崎層群中の砂岩に相当する。深掘部分の全てから確認されたため、調査区の全面に堆積していた、砂丘全体の基盤層と考えられる。日光に晒されると粒子単位で崩れる。



第3図 横第2遺跡土層柱状模式図



第4図 上層造構分布図（上層）



第5図 下層遺構分布図（下層）

## 第4節 検出遺構及び出土遺跡 竪穴建物

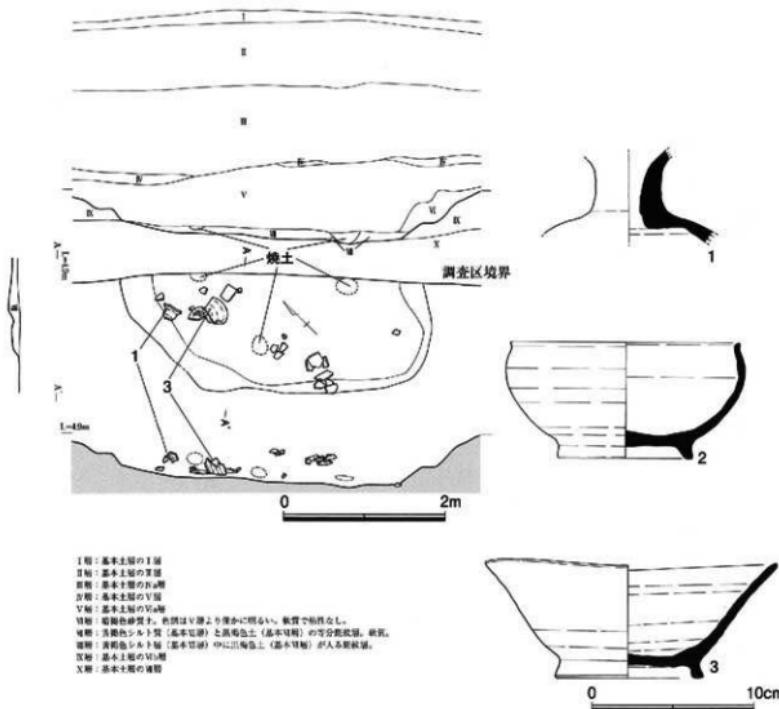
1棟検出された。

SA01

調査区北東部より検出された。遺構北側は調査区の外側であったため、平面形は不明である。土層断面からは、遺構床面付近に斑紋の強い砂質土が層状に堆積するほか、東側は砂質土の堆積後に土を盛った痕跡が確認された。また、遺構内には焼土を埋土とするピットが、床面付近の層状堆積を切るように形成されている。

以上の状況から、遺構はまずⅦ層まで面的に掘り下げた後、貼床を行い、東側を成形するために土を盛った後、使用時に焼土を埋土とするピットが設けられたと考えられる。他に、床面付近における焼土の集積は2ヶ所から確認された。その一方で、貼床面を越えて掘り込まれたものはなかった。これらは、本来柱穴であった可能性が高い。

遺構内からは遺物も多く出土した。1は須恵器の長頸壺の頸部である。2は口縁部の内湾する椀である。3は高台付の椀である。1と3は、竪穴住居の貼床面直上から出土したことから、



第6図 SA01実測図

遺構放棄とともに廃棄されたと考えられる。なお、埋土上層からも須恵器の集中が確認されたが、接合はするものの、胴部片の一部に過ぎず、床面から浮いた状態で出土したことから、遺構との関連性は薄いと考えられる。

#### 掘立柱建物

7棟検出された。いずれもⅦ層～Ⅸ層を遺構検出面とする。

#### SB01

調査区北西部より、SB02と重複して検出された。遺構は長軸が東西方向より北西－南東に約20°ずれていた。西側は調査区の境界にかかっていたため、柱穴の並びは推察の部分を残すものの、検出位置から棟持柱と考えられる柱穴が検出されたことから、2間×3間と考えられる。ただし長軸の対面は、柱穴の間隔が広がっていることから、この辺は、側柱が1本少なかつた可能性もある。埋土は黒色であり、柱穴の直径は20～30cmである。柱穴の間隔は、短軸が2.1mであるのに対し、長軸は1.3～1.5mであるが、長軸の対面は1.9mである。

南東部からは、棟持柱からクランク状に屈曲しながら掘立柱建物内に延びる浅い溝が検出された。付近で検出されたSX01の周縁を巡る浅い溝と埋土の質や検出状況が類似することから、何からの関連性が考えられる。

#### SB02

調査区北西部より、SB01と重複して検出された。遺構は長軸が東西方向より北西－南東に約20°ずれていた。西側は調査区の境界にかかっていたため、柱穴の並びに推察の部分を残すものの、北西部において柱穴の延長が確認できなかったことから、2間×3間である可能性が高い。埋土は暗褐色とSB01とは異なり、柱穴の直径は検出面で20～30cmである。柱穴の間隔は、東側の短軸と長軸の北側はいずれも1.6mだが、南側柱は1.6m～1mと不規則である。

#### SB03

調査区北側中央部より、SB04と重複して検出された。遺構は長軸が東西方向より北西－南東約15°にずれていた。柱穴の並びは1間×3間であり、柱穴の直径は、北側の1列こそ30cmと大振りだが、南側の1列は20cm未満である。柱穴の間隔は、長軸が1.8mであるのに対し、短軸は1.4mである。埋土は暗褐色である。

分布の重なるSB04との時期は、重複部における切り合いから、こちらのほうが後出と考えられる。

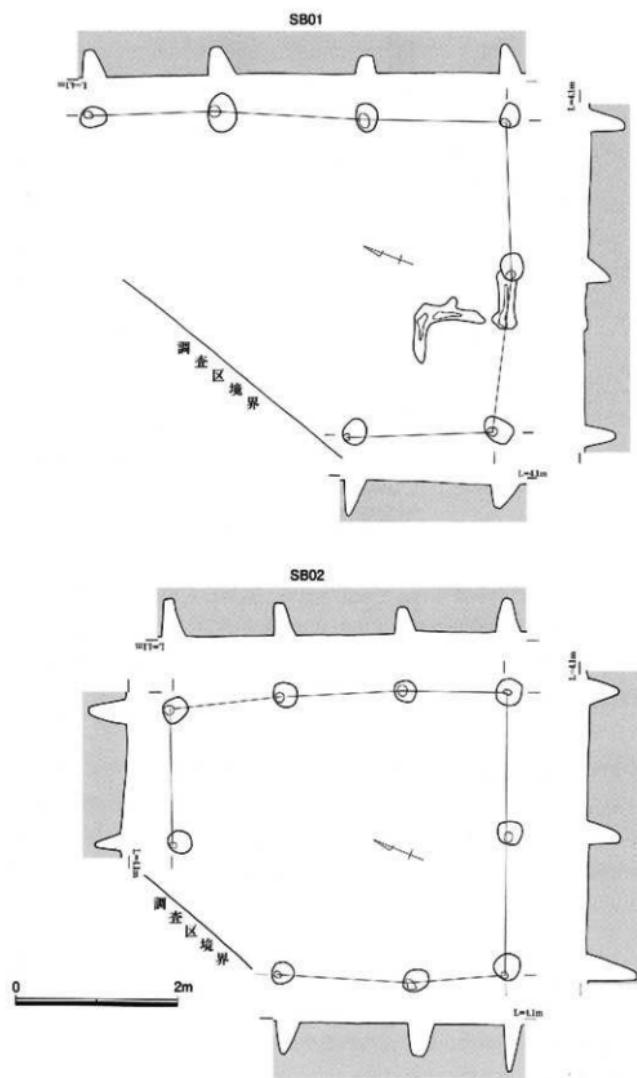
#### SB04

調査区北側中央部より、SB03と重複して検出された。遺構は長軸が東西方向より北西－南東に約20°ずれていた。柱穴の並びは、遺構は南側を削平により失っているため断定できないものの、重複するSB03と関連が深いと考えられることから、1間から3間である可能性が高い。柱穴の直径は約20cmであり、柱穴の間隔は、いずれも1.5mで統一されていた。埋土は黒色である。

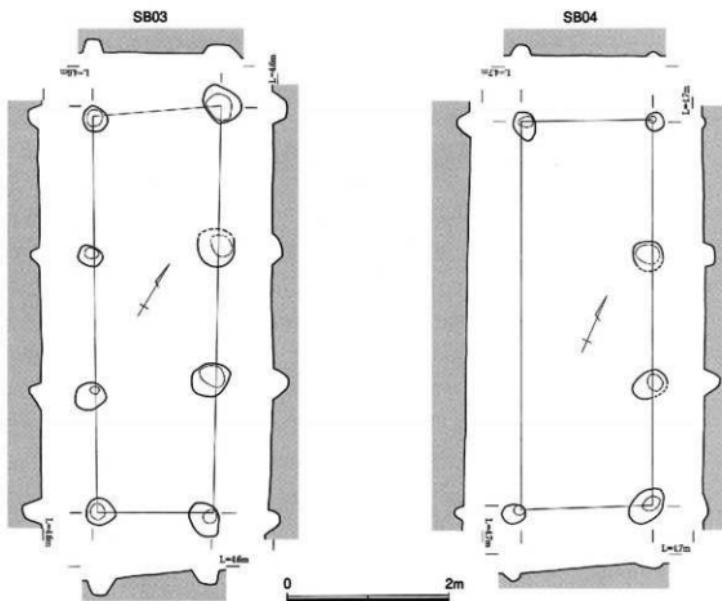
#### SB05

調査区南部より、SB06と隣り合って検出された。遺構の長軸はほぼ南北方向であった。柱

穴の並びは2間×2間であるが、南側の棟持柱は検出されなかった。柱穴の間隔は、長軸が22mであるのに対し、短軸は1.5mである。柱穴の直径はほぼ約40cmと大振りである。埋土は、黒褐色と暗褐色で構成されていた。



第7図 SB01, 02実測図



第8図 SB03、04実測図

#### SB06

調査区南部より、SB05と隣り合って検出された。遺構は長軸が南北方向より北西 - 南東方向に約20°ずれていた。柱穴は2間×1間であり、僅かながら棟持柱の突出が認められた。柱穴の直径は20～30cmであり、柱穴の間隔は、長軸が3.5m、短軸が1.6mであった。埋土は、黒褐色と暗褐色と灰褐色で構成されていた。

#### SB07

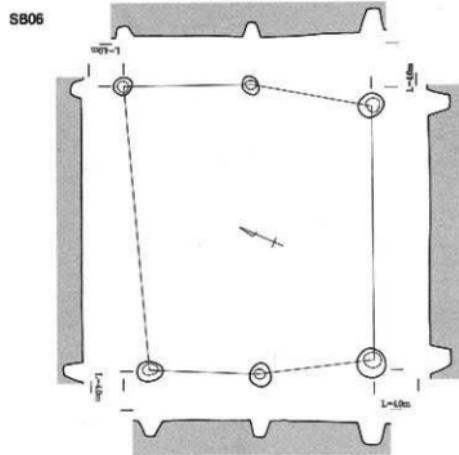
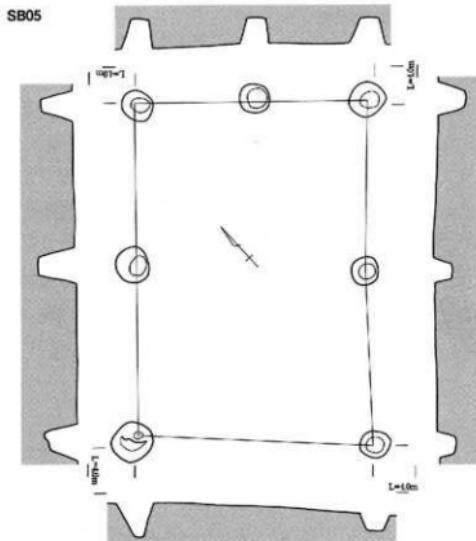
調査区中央やや南側、SB05の北隣から検出された。遺構は長軸が南北方向より北東 - 南西に約10°ずれており、溝によって切られていたためか、南東の隅と長軸の側柱は確認できなかつた。柱穴は2間×2間であり、柱穴の直径は約40cmである。柱穴の間隔は、長軸が2.1m、短軸が1.7mである。埋土は暗褐色と灰褐色で構成されていた。

#### 土坑

2基検出された。

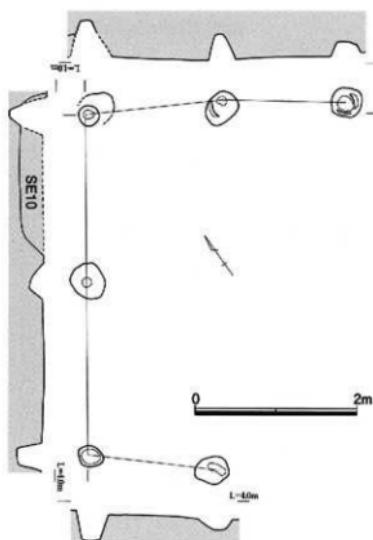
#### SC01

調査区東部より検出された。径1.5mの円形を呈しており、深さは約30cm、底面には平坦面を持つ。埋土下位からは多量の土器が出土したことから、使用不能となった遺物を廃棄したと考えられる。



0 2m

第9図 SB05、06実測図

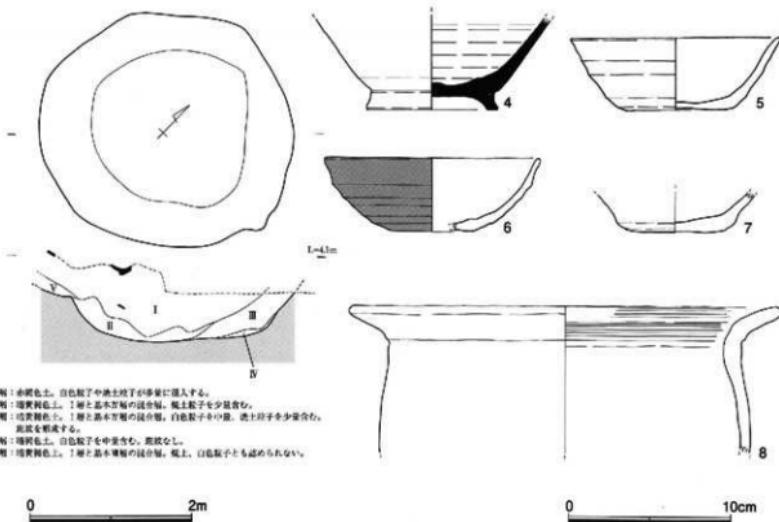


第10図 SB07実測図

4は、高台を持った須恵器の椀である。胴部はほぼ直線状に立ち上がるが、高台脇に微かな膨らみが認められる。5・6は、胴部外面に多くの縦が設けられた坏であり、5は特に顕著である。

#### SC02

調査区中央やや北側より検出された。遺構は約15cmと浅く、遺構の殆どをII層堆積時の搅乱によって失っている。残存部は長軸1m、短軸50cmの楕円形を呈する。埋土は黒色であり、遺物は全く認められなかった。



第11図 SC01実測図

上解：赤褐色土。白色粒子や焼土粒子が多量に混入する。  
下解：褐色褐土。上解と基本共通の混合層。焼土粒子を少量含む。  
Ⅰ層：褐色褐土。上解と基本共通の混合層。白色粒子を少量化する。  
Ⅱ層：褐色褐土。白色粒子を中量含む。泥炭なし。  
Ⅲ層：褐色褐土。上解と基本共通の混合層。燒土、白色粒子とも認められない。

## 溝

本遺跡から最も多く検出された遺構である。15条検出された。

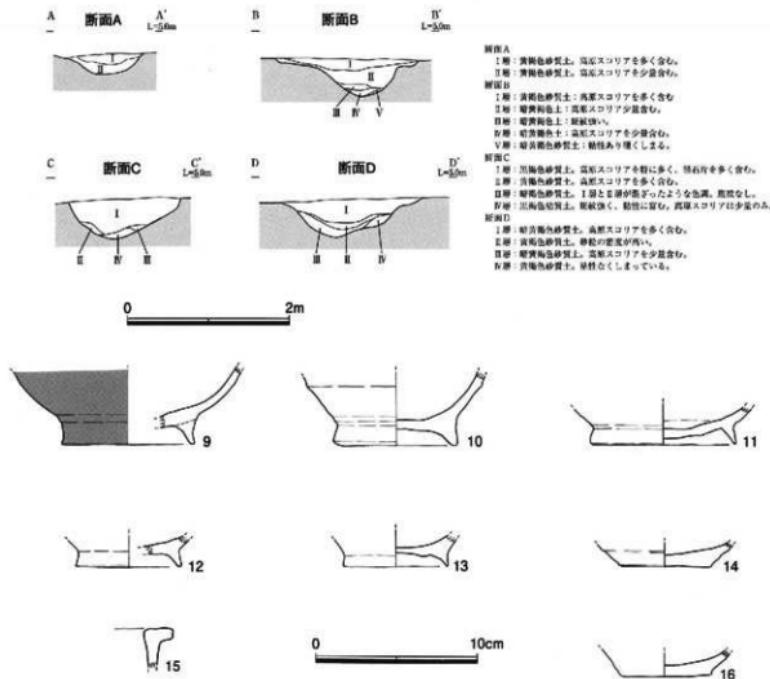
## SE01

調査区北壁の西端部より出現し、調査区境界に並行するように、南東方向に緩やかなカーブを描きながら伸びる。調査区北側を横断することから、長さは約50mにも達する。深さは西側では30cm程度であるが、東側では60cmを超える。それに伴い同時に幅も50cmから1m近くに広がる。検出面はV層上面であり、埋土には高原スコリアが多く混入するが、東部では下位に黄褐色の粘質土の含む層が認められる。この他、土器片も多く確認された。遺構はSE02、05、15に切られていることから、V層上面の検出遺構の中では古い時期の遺構と考えられる。

9～13は高台を持った壺である。いずれも胴部は膨らみながら急角度で立ち上がる。14・16は高台を持たないものである。また高台を除いた底面は9・11が丸底を呈するのに対し、他は平底である。なお、9は外黒土器である。15は壺の口縁部である。胎土や焼成から弥生土器と思われる。

## SE02

調査区の北側の北壁より出現し、南西方向に幅を広げながら伸びる。断面は方形であり、深



第12図 SE01内出土遺物実測図

さは約10cm程度と著しく浅い。下位を削平により消失しているため、残存部分の長さは約2.5mに過ぎないが、その中で幅は80cmから1.2mに広がる。検出面はV層上面であり、SE01を切っている。

#### SE03

調査区の北壁中部から出現し、調査区境界と並行する南東方向への残存を約8m確認した後に消失する。幅は約1mだが、深さは10cm程度である。検出面はV層上面であるが、埋土中には高原スコリアが非常に密集し、硬化層を形成するため、一次堆積と考えられる。

#### SE04

調査区北側の東部、VI層残存部の境界付近より、SE01のやや南側を並行する。削平により遺構はその幅すら定かでないが、残存部の長さは約5.5mを確認する。遺構は削平によりその殆どを失っており、幅も定かでない。ただし、深さは10cm程度であることから、遺構は小規模であったと予想される。埋土には高原スコリアが多く混入していた。遺構はその中部でSE15、16に切られている。

15は土師器の椀である。

#### SE05

調査区北側の東部において、トレンチ際より出現し、南西方向に伸びる。削平で消失するため、残存部の長さは2.5m程度であった。始点の幅は60cmだが、消失地点では1mと幅の広がりが認められる。深さは10cm前後であり、規模は小さかったと考えられる。検出面はV層である。遺構はSE01、06を切っている。

#### SE06

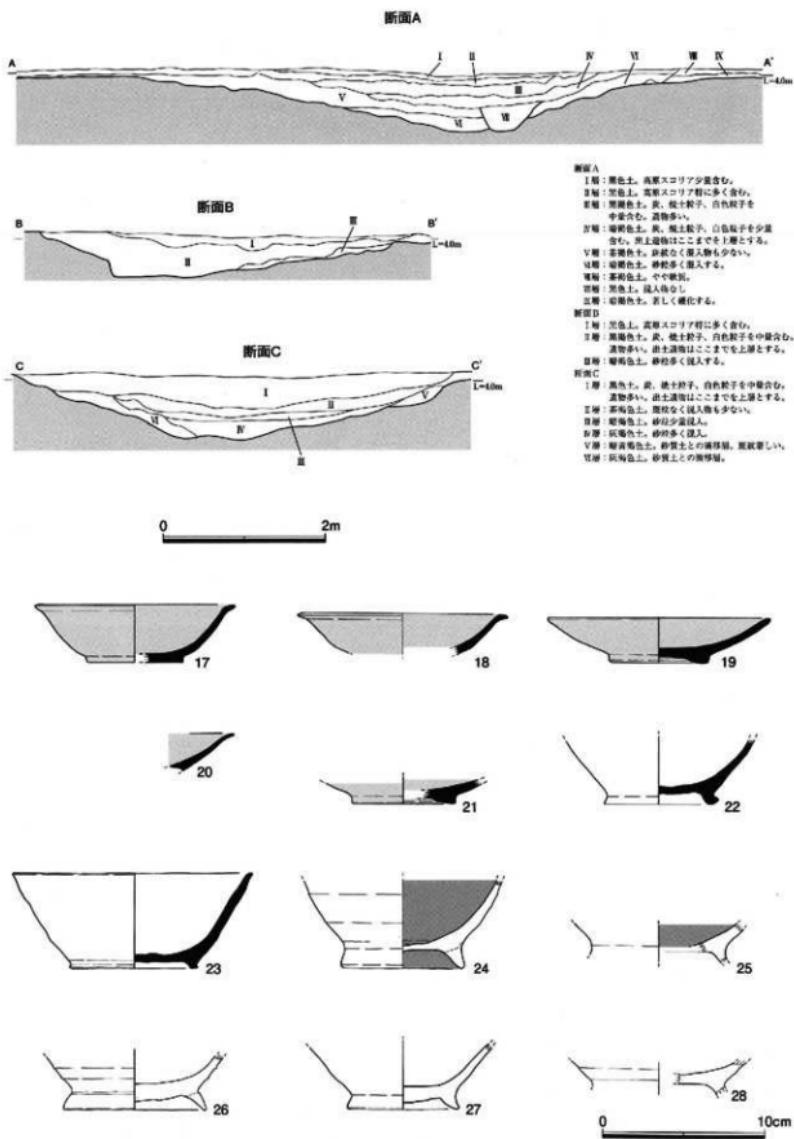
調査区北側の東部において、トレンチ際より出現し、SE01に沿って南東方向に伸びる。始め50cmあった溝幅は途中で細くなり、調査区内で消失するが、これはII層の削平の影響であろう。残存部の長さは7.5mであり、深さは10cm前後である。検出面はV層である。遺構はSE05に切られている。

#### SE07

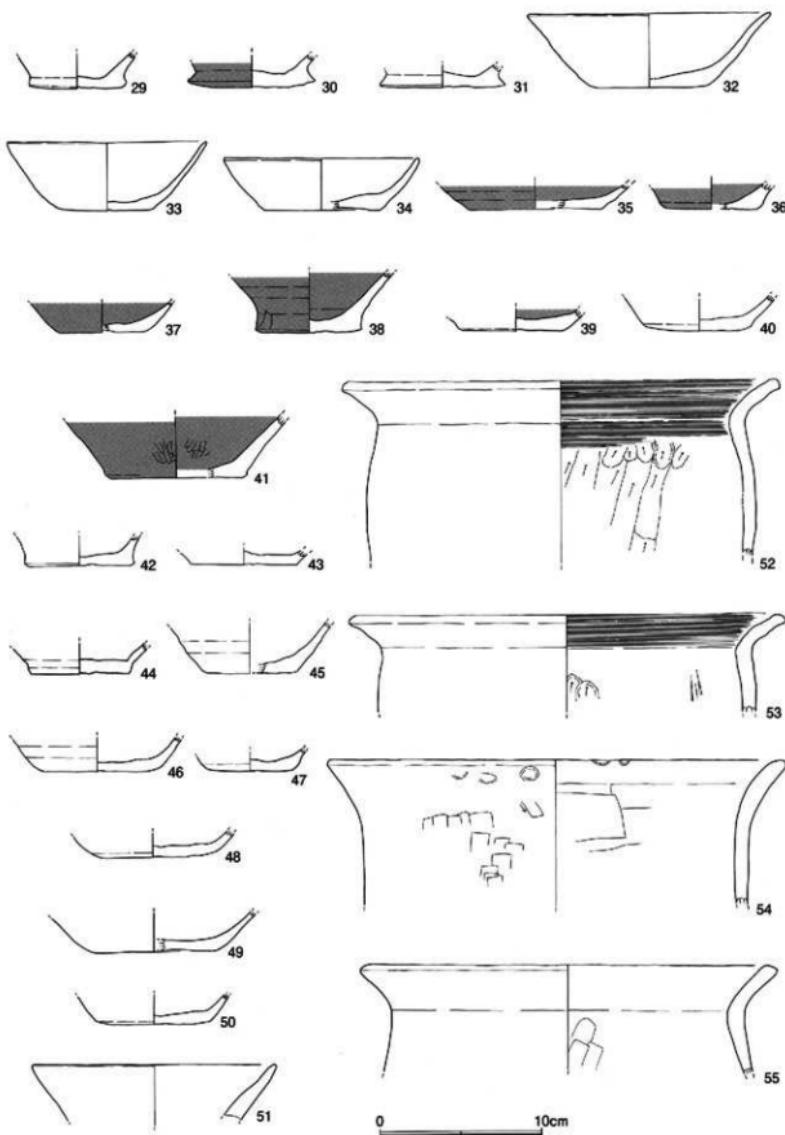
調査区北西部の北壁より出現し、南北に伸び、東壁で消失する。VI層除去後に検出されたものの、溝埋土中に高原スコリアが少量ながら含まれていたことから、本来の検出面はV層と考えられる。従って、検出時の溝の深さは20cm未満であったが、本来は40cm以上あったと推測される。確認部の長さは7.5mあるが、両端が調査区の境界に接していたため、実際の長さは不明である。遺構はSE01に切られている。

#### SE08

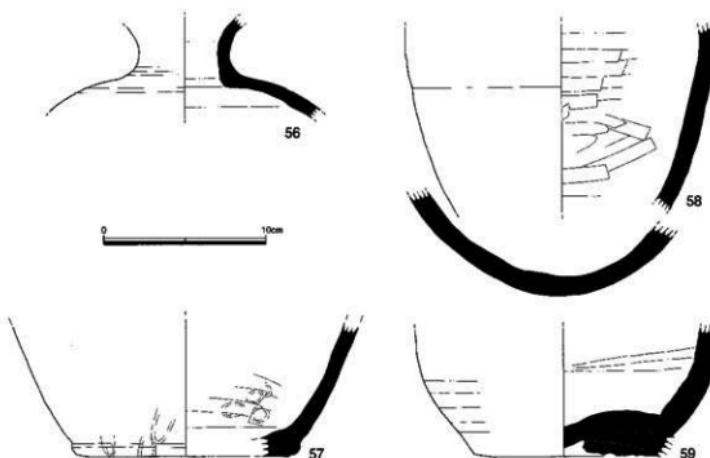
調査区の南側の東壁より、V層の落ち込みとして検出された。遺構は東側では西北西方向に10m程伸びるが、その後南西方向に屈曲し、4m程度伸びる。幅は、東側は5mを数えるが、屈曲後は4m余まで狭まる。深さは地点により若干の違いがあり、東側の調査区端部と屈曲部では70cm程度であるが、その中間地点では60cm程度である。しかしいずれも断面の傾斜はなだらかである。なお、終点はII層の削平により消失している。



第13図 SE08及び遺構内出土遺物実測図（1）



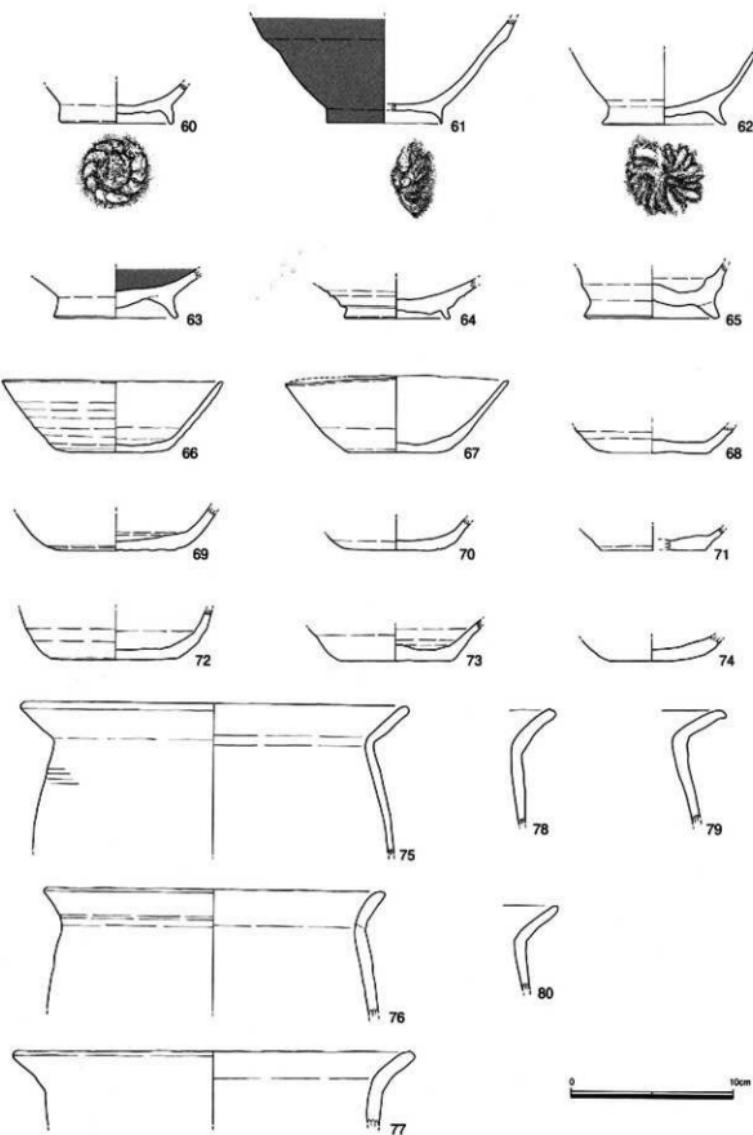
第14図 SE08内出土遺物実測図（2）



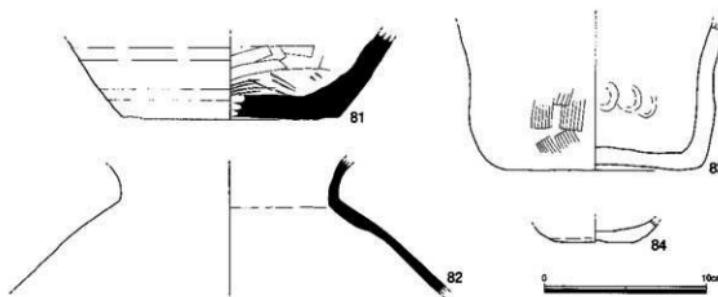
第15図 SE08内出土遺物実測図（3）

出土遺物は、主に高原スコリア下層より多量に出土する一方で、中層以下からは殆ど確認されなかった。また、遺物の多くは小片であり、かつ著しく摩滅していた。出土遺物の殆どが古代であったことを考えると、遺構は出土遺物よりもかなり遅い時期に構築された後、古代に至る間に埋没した凹地に廃棄物を投棄したと考えられる。

17～21は縁釉陶器である。17・18・20は壺である。高台脇が膨らみ、口縁部は外反する。18・20は高台のついた小皿である。高台は肉厚である。縁釉陶器はいずれも焼成が悪く、上釉が剥落している部分が多い。また、底部が残存するものは、底面まで釉が施されていることも特徴である。23～50は壺である。23は高原スコリア直下から出土した高台付壺である。胴部は膨らみながら急角度に立ち上がる。24は上層から出土した壺であり、直線的に立ち上がる胴部外面には稜が認められる。25は下層から出土した壺である。高台は低く、高台脇は僅かな膨らみも認められるが明瞭ではない。26～28の胴部は直線的に立ち上がる。29～31は、円盤状高台を行うもので、底部が外側に張り出し、胴部が直線的に立ち上がる。32は下層からの出土であり、胴部が僅かに膨らむものの明瞭ではない。なお、出土した壺の中には黒色土器も多く、24・25・39は内黒、30が外黒、35・36・37・38・41が両黒土器である。52～55は甕である。52・53の口縁部内面には刷毛状の工具による横ナデが行われ、胴部は縦位の工具によるケズリが行われる。53は口縁部と胴部の境界が不明瞭である。56～59は須恵器である。56は長頸壺の胴部上半である。57・58は同一個体である。甕もしくは長頸壺と思われる。58は横断面に歪みが生じている。また59は、底面に須恵器の壺や壺体の付着が認められる。このことから、焼成中に落下等不測の事態が起きたと考えられる。



第16図 SE10内出土遺物実測図（1）



第17図 SE10内出土遺物実測図（2）及びSE11内出土遺物実測図

#### SE09

調査区南側西部において出現し、約10cm、幅約70cm程度の深さが終点まで継続するが、一帯はVI層下面まで消失していることから、本来はもっと深く、始点の西側にも存在したと思われる。遺構は東南東方向に14mほど伸びるが、方向は直線ではなく、途中南東方向に3m程度屈曲した後再び向きを戻すため、ややクランク状を呈する。SE08に接して消失するが、埋土が非常に似ていたために、SE08との切り合いは不明であった。ただしSE08における遺物の出土状況から、SE09の方が後出と考えられる。

#### SE10

調査区南側西壁より現れ、南東方向に約14m伸びた後に、南方向に向きを変えて約7m伸び、SE08と接する地点で削平により消失する。遺構は、出現地点から屈曲部までは約25mの幅を維持するが、屈曲後は約70cmまで幅を狭める。また屈曲部に至るまでの直線部分は溝の最深部がもう一段深く下がるが、途中3m程度、段の消失が確認された。排水溝として、このような段は機能を損ねることから、遺構の目的は排水以外にあったと推測される。遺構はSE09、13より新しく、SE12より古い。

60～74は壊である。60～65は高台を持つものである。60～62は、底面に放射状の指頭押圧、もしくはケズリが行われる。いずれの高台脇もわずかに膨らみが認められ、上部は直線的に立ち上がる。64・65の脇部外面には明瞭な稜が残される。66は高台を持たないものの、同様の稜が認められる。なお、底面から脇部の立ち上がりは直線的または高台脇が僅かに膨らむ程度であるが、72は高台脇の膨らみが顕著である。75～80は壊である。いずれも摩滅が激しく調整不明なものが多い。81・82は須恵器である。81は長頸壺もしくは壺の底部である。82は壊であり、外面には格子目のタタキが明瞭に残される。83は器形不明の土師器である。

### SE11

調査区南側北壁より現れ、南に伸び、SE08内も突き進んで10m近く伸びた後に、SE08の最深部で消失する。土層断面から、SE11はSE08の埋没中に構築されたと考えられる。遺構は上部を消失しており、SE08の断面からは60cmの幅が確認できる。

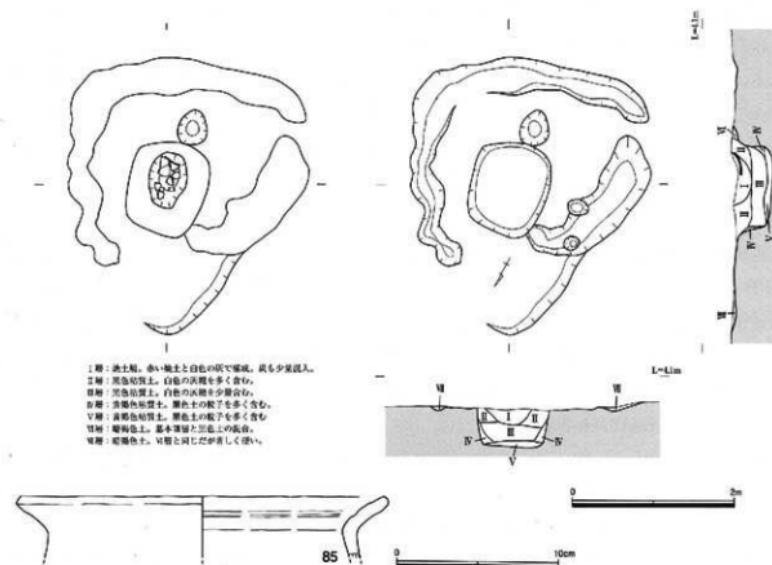
84は土師器碗の底部である。高台脇には膨らみを認めることができる。

### SE12

調査区南側北壁より現れ、南西方向に約8m伸びた後に、南東方向に向きを変え3m伸びる。遺構は上部を消失している以上に、元から浅かったと考えられ、残存部の深さは10cm程度であり、途中で消失する。埋土は、黒色であることから、SE10埋没後から高原スコリア降灰前に構築されたと考えられる。

### SE13

調査区を南北に縦断する唯一の遺構である。始まりは北側北壁付近であり、南壁で消失した後、南側北壁に出現する。途中空白があるものの、規模や埋土の類似性や、同一線上にあることから、一連の遺構と判断した。遺構は西南西に約15m伸びた後、SE10に切られる。検出面はⅥ層である。残存部の深さは10cm程度であった。



第18図 SZ01及び遺構内出土遺物実測図

## SE14

SE10の南端部分から現れ、南西方向に伸びてSE08を横断した後、南壁に到達する。SE08にかかる前は、幅40cmで断面が方形を呈するが、SE08横断後は幅70cmに広がり、L字ないしはV字状を呈する。遺構はSE08を切っており、横断後にⅦ層の節理に沿うように伸びる。これは、意図的に構築した結果と考えられる。

## SE15

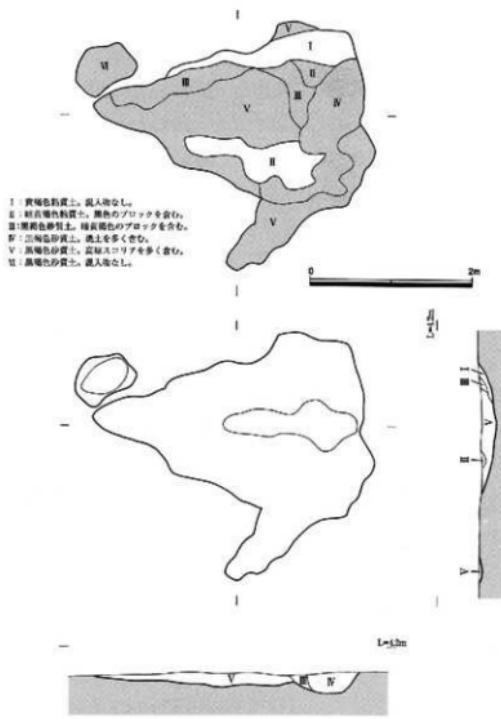
調査区北側北壁より現れ、南西方向に約5m伸びた後、削平により消失する。埋土は砂層であり、黒色土や暗褐色土、高原スコリアで構成される他の遺構とは大きく異なる。幅は、出現位置では1.5mだが、消失部付近では3mまで広がる。土層断面から、本来の検出面はⅥ層上面と考えられる。

## 不明遺構

2基検出された。

## SZ01

調査区北側の西部で検出された。遺構本来の検出面は更に上位であり、大半が削平されたと考えられる。遺構は中央に長軸90cm、短軸70cmの隅丸方形を呈する土坑を持つ。土坑の深さは約35cmであり、壁面の立ち上がりはほぼ垂直である。下部は構築の際に生じたⅦ層がやや暗い色調となって堆積するのに対し、上部は長軸50cm、短軸35cm、深さ15cmにわたる焼土または白色粘質土の集積が認められる。上部と下部は埋土に明瞭な違いが認められることから、異なる埋没過程によるものと考えられる。埋土や、上部から出土した土器の器面は激しく摩滅していたことから、下部は構築後まもなく



第19図 SZ02実測図

埋められ、上位において火を使用する行為が行われたと推測される。

また、遺構の周囲には、幅20～40cmの浅い溝が巡っていた。溝は南部を頂点とした一辺2～2.5mの逆三角形状を呈し、南東部で中央の土坑に接するほか、また南部は内側の肩部が認められない。一方、南西部と北東部は開口部が認められるが、遺構全体が検出面を消失していることから、本来の溝は掘り込みを環状に巡っていた可能性が高い。

85は、中央の掘りこみ上層から出土した甕である。口縁の約半分が出土した。全面に著しい摩滅が認められる。

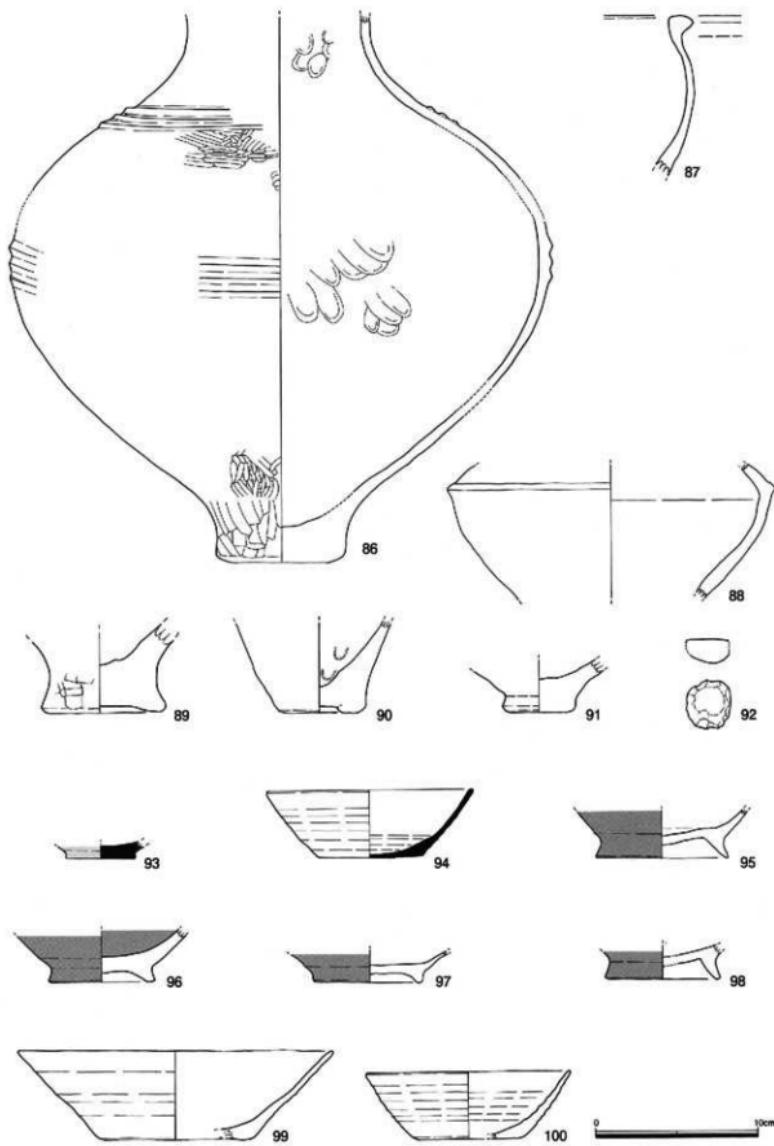
#### SZ02

調査区北側の南西部より検出された。遺構は、全体的に北東から南西に向かって広がる二等辺三角形状を呈しており、長い二辺が約1.6m、短い一辺が約1mである。遺構内は長辺に沿って帯状に黄褐色の粘質土が伸び、中央と短辺に黒色土が集積する。黄褐色の粘質土は、遺構底面から僅かながら浮いていた。また、短辺の黒色土からは焼土が多く混入していた。長辺と短辺の接触する部分からは黒色土の帯状の集積も確認された。遺構は浅く、短辺の焼土の集積部分が15cm近いのに対し、他はいずれも10cm以内である。

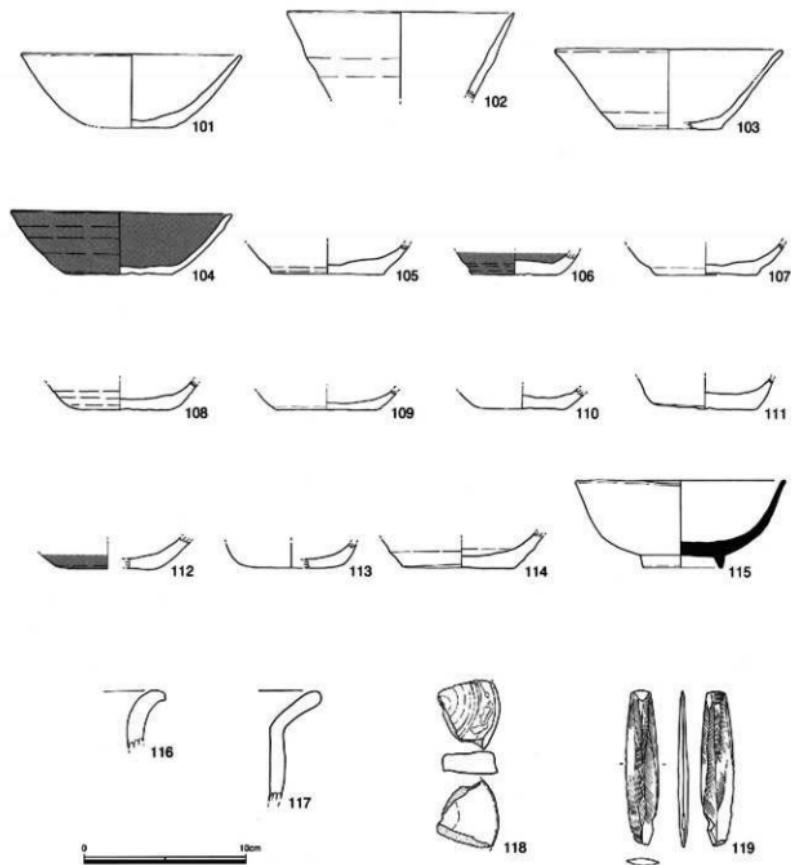
#### 遺構外出土遺物

ここでは、遺構に伴わない遺物を一括する。調査区は、V層の遺構検出面まで削平を受けたため、包含層の残存部自体がごく一部であった。また、遺物の出土はV層が多かったが、実測不能な小片が主体であったため、掲載遺物はVI層出土のものが多くなった。

86～92は弥生土器である。86は、胴部が大きく張り出す壺である。頸部と胴部の境界、及び胴部最大径には3条の突帯が横位に貼り付けられる。また底部は工具により削り出され、87は口縁が内湾する小形の甕である。88は壺であり、張り出した胴部の最大径の位置には、突帯が一条貼り付けられる。89は、その立ち上がりから甕と思われる。底部は僅かに上げ底を呈する。90の器形は不明である。91は壺と思われる。92は高壺の底である。93～117は古代の土器である。93は縁軸陶器である。円盤状高台を有し、底面にも釉が残される。94は須恵器である。胴部外面には多くの稜が設けられる。95～98、104、106、112は、黒色土器である。両黒土器である96、104、106以外は全て外黒土器である。98・99は胴部外面に多くの稜が設けられた土師器である。103は底面から直線的に立ち上がる胴部を持つが、他は立ち上がりが若干膨らむ。116・117は甕である。118はトチンである。115は近世もしくは近代に相当する白磁の椀である。119は硬質頁岩を用いた磨製石鎌である。弥生時代に相当すると考えられる。



第20図 遺物包含層内出土遺物実測図（1）



第21図 遺物包含層内出土遺物実測図（2）

## 第Ⅲ章 調査の成果

### 第1節 検出遺構について

今回の調査では、竪穴建物1棟、掘立柱建物7棟、土坑2基、溝5条、不明遺構2基が検出された。

出土土器は、遺構間の接合例が多い。中でも多いのがSE08上層に関連する接合資料であり、SA01、SC01、SE01、SE10、SE11の出土資料と接合する。このうち、時期が明らかに後出であるSE01を除いた他の遺構は、時期的に近接していたことと思われる。さて、これらの遺物と接合するSE08上層だが、一方でVI層との接合例が多いことも注意せねばならない。つまり、SE08上層は、VI層と同時に形成（埋没）したと言うことである。それは裏返せば、VI層形成時には、SE08は既にある程度埋没していたことを意味する。よってSE08は、他の遺構よりも先行する時期に構築されたと考えられる。SE08上層は下層との接合例も多いが、SE08下層出土遺物の中には22、23のように時期が遡るとみられる遺物も出土しており、埋没に至るまでは数百年を要したと考えられる。更に、遺構底面からの出土遺物は確認されていないことから、SE08の構築時期は、それらの遺物よりも更に遡ると考えるべきであろう。遺跡内から検出された溝は、全て砂丘から新別府川に向かう傾斜に直交または平行するが、SE08だけは、標高が高くなる西側に向かって下がるという、溝本来の構造とはかけ離れた特徴を持つ。では、何のために構築されたのか。ここで浮上するのが、隣接する櫛1号墳の存在である。櫛1号墳の構築と近い時期に、この地に古墳が築造されたならば、古代土器の埋没時は遺構底面が埋没した頃になるのではないだろうか。しかし、仮にこの推論が正しかったとしても、既に上層が消滅しており、土層断面からも確認できないため反証はできない。しかし今後周辺で調査を行うにあたり、上記の遺構が検出される可能性があることは指摘したい。

SZ01は、中央土坑上位に焼土が多く混入していたことから、炉等、火を使う施設であったと考えられる。隣接するSB01からは柱穴間をクランク気味に通過する浅い溝が検出されたが、規模がSZ01の外周を巡る浅い溝に近いことから、両者には関連性が考えられる。しかし、遺構上部を完全に消失した状態では、これ以上の推測は具体性を欠くと言わざるを得ないため、関連性を述べるに留めたい。

SZ02は、その構造から住居に付設されたカマドと考えられる。火口が西側を向いているが、このような例は宮崎平野においてはしばしば認められる。II層の削平により既に大半を消失したもの、ここには竪穴建物が存在したと考えられる。ただし、残存部から、竪穴建物と推測させ得る土器の出土状況は確認されなかった。また、カマドのみの検出であるため、竪穴建物の時期は推測が不可能であった。

### 第2節 出土遺物について

櫛第2遺跡の土器組成は、弥生土器、土師器、黒色土器、須恵器、綠釉陶器から成り、南九

州において一般的な古代集落の様相を呈していた。

弥生時代の遺物は、IV層もしくはVIb・c層から、古代の遺物と共に出土した。上に記したように、これらの層は斜面上から押しやられたもので、純粋な弥生時代の遺物包含層からの出土ではない。87は、時期的に中期初頭から前期まで遡る可能性があるが、全般的に中期の範疇で捉えられる。

古代の遺物として大多数を占めたのは土師器であった。坏ないしは高台付椀が主体である。土師器の中には、黒色土器が多量に認められたほか、所謂「放射状のケズリ」の行われた底面を持つ土器も3点認められた。

縁軸陶器は6点出土した。高台付皿と椀に限定され、底部の残るものは全て底面まで釉が塗布されていたことから、二度焼きが行われたと考えられる。軟質な焼成や釉の色調から、いずれも防長産と見られる。

時期は、21、22は時期的に8世紀後半になる可能性を残すが、他は概ね9世紀前半を中心として9世紀末に収まるものである。「放射状のケズリ」を行った遺物が少ないので、この土器が製作されたとされる9世紀後半には、集落は既に衰退期に入っていたためと推測される。

### 第3節 遺跡内の土層堆積と遺構の構築時期について

IVb・c層は、本来下層に堆積するVI層のブロックが混入するなど、自然流下を考えるならば非常に規模が大きかったと考えられる一方で、ガリー等雨水による侵食痕跡が全く認められなかったことや、層中に焼土塊や炭、土器片等の生活痕跡が多く認められることから、人為的に行われたと考えられる。恐らく、砂丘上に展開していた集落の営続中に、遺構構築時の廃土を、生活廃棄物もろとも斜面下へ押しやったのであろう。そのため、この時に形成されたIVb・c層は、斜面下には分厚く堆積するものの、調査区全面に一樣に堆積したのではなく、IV層の残存する北側は、段丘上から続く傾斜面の続きとして、南側よりも一段高くなっていたと推測される。なお、かつて「宮崎史蹟調査」において窯跡とされた焼土の集積は、この流下の結果生じたと考えられる。

検出遺構の時期を推察するに当たっては、①遺構の切り合い、②層位、③主軸方向の順に前後関係を考えた。

遺構の切り合いは、主に溝状遺構について確認した。VII層上面はSE08・SB07→SE09→SE10、VI層上部はSE01→SE02・SE05という順序が認められた。

層位は、遺構埋土も含む。SE08は古代の遺物が残される以前に無遺物層が形成されていることから、SB07より古いことがわかる。また、SE03はV層（高原スコリア）の一次堆積が確認されることから、遺構上位に二次堆積層が認められるSE01をはじめとしたVI層上面検出の溝状遺構よりも古いと考えられる。また、主軸方向は、掘立柱建物の前後関係を考えた。SB03、04、05、07とSB01、02、06の二分が可能である。その場合、SB07がSE09、10に切られていることから、より古いと考えられる。ただし二分された中にも、SB01、02とSB03、04はそもそも同じ位置であることから、時期差が存在したと考えられる。

さて、このような点を考慮しながら、調査区内における土層の堆積状況と遺構の変遷を辿ると、以下のようなになる。

- ① 海底堆積物が形成される（Ⅷ・Ⅸ層）
- ② 宮崎平野海岸部において砂丘が形成されると共に、黄褐色シルト質土が堆積する（Ⅶ層）
- ③ ②で形成された砂丘上に、黒褐色土が堆積する（Ⅵa～b層）

I期：SE08

II期：SA01, SB03, SB04, SB05, SB07, SE07

III期：SB01, SB02, SB06, SE09, SZ01

IV期：SC01, SE10, SE11, SE13

- ④ 8～11世紀、高原スコリアが降灰（V層）

V期：SE03

VI期：SE01

VII期：SE02, SE05

Ⅷ期：SE15

- ⑤ 砂丘斜面上の暗褐色土が、土器や焼土と共に調査区内に流下する（Ⅳb・c層）
- ⑥ 暗褐色土が堆積する（Ⅳa層）
- ⑦ 煙地したことにより、耕作土が形成される（Ⅲ層）
- ⑧ 昭和49年の河川改修時、調査区内の大半をⅦ層上面まで漉き取り、その後河床堆積物を埋めてかさ上げを行う（Ⅱ層）
- ⑨ 資材置き場として使用するにあたり、バラスを敷設する。ほどなくして、水道を通すなどの工事も行われる（I層）

遺跡の最盛期はⅡ・Ⅲ期であり、建物もほぼその時期に集約する。対してⅣ期以降、特に高原スコリア降灰以降には、溝状遺構のみとなる。その後、斜面上から黒色土が人為的に流下することから、高原スコリア降灰後の本来の集落地は斜面上であったと推測される。さらに遺跡地は川沿いの低地であることを考えるならば、建物の存在したⅡ・Ⅲ期にしても、本来の居住の中核は斜面上であったと考えるのが妥当であろう。

本遺跡の立地する櫛中学校周辺は、弥生時代から古墳時代の遺跡であることが知られていたが、今回の調査によって、古代にも遺跡が営まれていたことが新たに判明した。出土遺物からは、宮崎平野に分布した平均的な古代集落の様相をうかがうことができる。しかしながら、当時の集落の主要部分は櫛中学校から櫛地区公民館の敷地内にあったと考えられ、集落の規模や弥生～古墳時代とのつながりは、今後の課題として残されることになった。

出土土器観察表(1)

遺物 番号	通説名	種別	法量(cm)			調整	色調	胎土	備考	写真
			沿縦	口徑	厚高					
1	SA01 VI層	須恵器 長頸壺				外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	外: 灰 内: 灰	白・黒の微細粒: 少		
2	SA01	須恵器 壺	11.8	7.1	4.2	外: 横ケズリ→ナデ 内: 回転ナデ 底: 高台貼付→ナデ	外: 灰 内: 灰			
3	SA01	須恵器 壺	(18)	7.0	8.9	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	外: 灰・灰白 内: 灰・灰白			
4	SC01 SE08上 SE10	須恵器 壺			7.45	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ 底: ハラ切り	外: 灰白・灰 内: 灰白・灰			
5	SC01 F VI層	土師器 壺	12.8	4.5	6.0	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	外: にぶい橙 内: 橙	透明、褐色、黒色、 灰色の粒子: 微		
6	SE01 SC01	土師器 壺	(13.2)	4.6	(5.2)	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	外: 橙 にぶい赤褐 内: 褐褐 にぶい橙	透明、褐色の粒子: 微		
7	SC01	土師器 壺			5.7	外: 四転ナデ 内: 四転ナデ 底: ハラ切り	外: 橙 内: 橙	褐色、白色の粒子: 微		
8	SC01 SE01 IVb層 VI層	土師器 壺				外: 横ナデ→ 工具ナデ 内: 工具ナデ→ ケズリ	外: にぶい褐 暗黄褐 内: にぶい黄褐 灰黄褐	白色、褐色の粒子、 角閃石: 橙		
9	SE01	土師器 壺			(8.1)	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ 底: 回転ナデ	外: 橙 内: 橙	透明の粒子: 微		
10	SE01	土師器 壺			7.0	外: 回転ナデ 内: 風化にて不明 底: 回転ナデ	外: 橙 内: 橙	褐色、褐色の粒子: 微		
11	SE01	土師器 壺			(8.9)	外: 回転ナデ 内: 風化にて不明 底: ハラ切り→ナデ	外: 橙 内: 浅黄褐 底: ハラ切り→ナデ	褐色、黒色、灰色、 白色の粒子: 微		
12	SE01	土師器 壺			(6.4)	外: ナデ 内: ナデ 底: 風化にて不明	外: 橙 内: にぶい橙	白色、黒色、茶色の 粒子: 微		
13	SE01	土師器 壺			(5.3)	外: 風化にて不明 内: ナデ 底: ハラ割り	外: 橙 内: 橙	赤褐色の粒子: 微		
14	SE01	土師器 壺			(5.4)	外: ナデ 内: ナデ 底: ハラ切り	外: 橙 内: 橙	赤褐色の粒子: 微		
15	SE01	弦生土器 壺				外: ナデ 内: ナデ	外: 橙 内: 橙	褐色、黒色、透明、 白色の粒子: 微		
16	SE04	土師器 壺			(4.2)	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ 底: ハラ割り	外: 橙 内: 橙	赤褐色の粒子: 微		
17	SE08	縄輪陶器 壺	(12.0)	3.7	(6.0)	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ 底: 不明	外: 灰白・灰オリー ブ 内: 灰白・灰オリー ブ		底面にも釉あり 防長産	
18	SE08上 SR08F	縄輪陶器 壺	(12.2)			外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	外: 灰オリーブ・灰 白 内: 浅橙 オリーブ 灰	灰色、黒色の粒子: 微	防長産	
19	SE08J.	縄輪陶器 高台付皿	(13.5)		(6.0)	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ 底: 回転ナデ	外: 橙 オリーブ灰 内: 浅橙 オリーブ 灰	褐色の粒子: 微	底面にも釉あり 防長産	
20	SE08上 E08下	縄輪陶器 壺				外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	外: 灰オリーブ・灰 白 内: 灰オリーブ・灰 白	灰色の微細な粒子: 微	防長産	
21	SE08上 SE08F	縄輪陶器 高台付皿			(6.2)	外: 風化にて不明 内: 風化にて不明	外: 灰オリーブ 内: 灰オリーブ	灰色の粒子: 微	底面にも釉あり防長 産	

出土土器観察表 (2)

遺物 番号	遺構名	種別	法番 (cm)			調整	色調	胎土	備考	写真
			口径	器高	底径					
22	SE08下	須恵器 环			6.7	外：回転ナデ 内：回転ナデ 底：回転ナデ	外：灰・暗灰 内：灰白・灰・暗灰			
23	SE08下	須恵器 环	(14.75)	6.15	7.65	外：回転ナデ 内：回転ナデ 底：回転ナデ	外：灰・灰白・暗灰 内：灰・灰白・暗灰			
24	SE08上	土師(内黒) 环			7.3	外：回転ナデ 内：回転ナデ 底：ヘラ切り	外：にぶい桜 暗灰 内：暗灰・灰桜	褐色、黒色の粒子： 微		
25	SE08上	土師(内黒) 环				外：回転ナデ 内：ミガキ	外：浅黄桜 内：黒	透明粒子：微	内面に黒度あり	
26	SE08上	土師器 环		(8.8)		外：回転ナデ 内：回転ナデ 底：ヘラ切り	外：にぶい黄桜 桜 内：桜	白色粒子：微	外面にスス付着	
27	SE08上	土師器 环			6.7	外：回転ナデ 内：回転ナデ 底：ヘラ削り	外：にぶい桜、桜 内：桜	黑色、褐色、灰色、 白色の粒子：中		
28	SE08上	土師器 环				外：回転ナデ 内：ミガキ	外：桜 内：黒	砂粒：微		
29	SE08上	土師 环			4.0	外：風化にて不明 内：風化にて不明 底：ヘラ切り	外：にぶい桜 内：浅黄桜	褐色の粒子：微		
30	SE08上	土師(外黒) 环			7.9	外：横ナデ・回転ナ デ 内：横ナデ 底：ヘラ削り	外：桜 内：にぶい桜	赤褐色の粒子：微		
31	SE08上	土師(外黒) 环				外：回転ナデ 内：回転ナデ 底：ヘラ切り	外：桜 にぶい赤桜 内：桜 にぶい赤桜	褐色の粒子：中		
32	SE08下	土師器 环	15	4.6	5.9	外：風化にて不明 内：風化にて不明 底：ヘラ切り	外：桜 内：桜	赤褐、褐、黒色の粒 子：微		
33	SE08上	土師器 环	12.2	4.3	4.7	外：回転ナデ 内：回転ナデ 底：ヘラ切り	外：にぶい桜 内：にぶい黄桜	透明、褐色、白、灰 色の粒子：微		
34	SE08上	土師器 环	(11.7)	3.25	(7.2)	外：回転ナデ 内：回転ナデ 底：ヘラ切り	外：桜 内：桜	黑色、褐色の粒子： 微		
35	SE08下	土師(両黒) 环		(8.2)		外：回転ナデ 内：回転ナデ 底：ヘラ切り	外：桜 内：桜	黑色の粒子：微		
36	SE08上	土師(両黒) 环		(5.5)		外：回転ナデ 内：回転ナデ 底：ヘラ切り	外：にぶい赤褐 黑 茶～赤褐の粒子：少 量 内：明赤褐			
37	SE08上	土師(両黒) 环		3.4		外：回転ナデ 内：回転ナデ 底：ヘラ切り	外：桜 内：桜	白色、灰白の粒子： 微		
38	SE08上	土師(両黒) 环		5.6		外：回転ナデ 内：回転ナデ 底：ヘラ切り	外：にぶい桜 内：にぶい桜	赤褐色の粒子：微		
39	SE08上	土師(内黒) 环			6.1	外：回転ナデ 内：回転ナデ 底：ヘラ切りナデ	外：桜 黒 内：桜	褐色、白色の粒子： 微		
40	SE08上	土師 环			(5.2)	外：回転ナデ 内：回転ナデ 底：ヘラ切り	外：桜 内：桜	褐色、灰色、白色の 粒子：微		
41	SE08上	土師(両黒) 环			(8.1)	外：磨き 内：回転ナデ→ミガ キ 底：ミガキ	外：にぶい桜 内：にぶい桜	にぶい桜の粒子：微		

出土土器観察表 (3)

遺物番号	遺構名	種別 器種	法寸 (cm)			調整	色調	胎土	備考	写真
			口径	器高	底径					
42	SE08 F	上部器 壺			(6.2)	外：回転ナデ 内：回転ナデ 底：ヘラ切り	外：橙 内：橙	褐色、暗褐、白、透明の粒子：中		
43	SE08上	上部器 壺			(6.6)	外：回転ナデ 内：回転ナデ 底：ヘラ切り	外：浅黄緑 内：浅黄緑	褐色、赤褐色の粒子：中		
44	SE08 L	上部器 壺			6.2	外：回転ナデ 内：回転ナデ 底：ヘラ切り	外：褐色 内：褐色 底：にぶい橙	黑色、白色、透明、褐色の粒子：微		
45	SE08上	土師器 壺			(5.8)	外：回転ナデ 内：回転ナデ	外：橙 内：橙	褐色の粒子：微		
46	SE08 L SE11	上部器 壺			6.3	外：回転ナデ 内：回転ナデ 底：ヘラ切り→ナデ	外：橙 内：橙	褐色、暗褐、白の粒子：微		
47	SE08 L	土師器 壺			3.2	外：風化にて不明 内：風化にて不明 底：ヘラ切り	外：橙・褐灰 内：橙	赤褐色、白色の粒子：微		
48	SE08 L	土師器 壺			12.3	外：回転ナデ 内：回転ナデ 底：ヘラ切り→ナデ	外：橙 内：橙	褐色、黒色の粒子：微		
49	SE08上	土師器 壺			(7.6)	外：風化にて不明 内：風化にて不明 底：ヘラ切り→ナデ	外：橙 内：橙 底：灰色	褐色の粒子：微		
50	SE08上	土師器 壺			(5.0)	外：風化にて不明 内：風化にて不明 底：ヘラ切り	外：橙 内：橙	褐色、白色の粒子：微		
51	SE08上	土師器 壺	(15.0)			外：風化にて不明 内：回転ナデ	外：橙 内：橙	褐色、暗褐色、半透明の粒子：微		
52	SE08 L	土師器 壺	(26.4)			外：横ナデ 内：工具ナデ→ケズリ	外：橙 内：にぶい橙	透明の粒子：微		
53	SE08上	土師器 壺	(26.0)			外：横ナデ 内：工具ナデ→ケズリ	外：橙 内：にぶい黄緑 底：黒	赤褐色、白色、透明の粒子：微		
54	SE08上 VI層	土師器 壺	(26.1)			外：指押さえ→工具 ナデ 内：指押さえ→横ナ デ	外：にぶい黄緑 内：にぶい黄緑	白色、黒色の粒子：微		
55	SE08 L VI層	上部器 壺	(24.4)			外：横ナデ 内：横ナデ→ケズリ	外：橙 内：橙	にぶい橙 内：にぶい橙	透明、褐色、赤褐色の粒子：微	
56	SE08 L SE08 F VI層	須恵器 壺				外：回転ナデ 内：回転ナデ	外：白 内：灰			
57	SE08 F	須恵器 壺または壺			(13.2)	外：回転ナデ→指圧 内：工具ナデ→指圧 ナデ	外： 内：			
58	SE08 L	須恵器 壺または壺				外：回転ナデ 内：工具ナデ→指圧 ナデ	外：灰 内：灰	微細な黒色粒：少	自然釉	
59	SE08 L	須恵器 壺または壺			(11.4)	外：回転ナデ 内：工具ナデ→指圧 ナデ 底：ナデ	外：灰 内：灰	微細な黒色粒：少	自然釉	
60	SE10	土師器 壺			(6.8)	外：回転ナデ 内：風化にて不明 底：花弁状圧痕	外：浅黄緑 内：浅黄緑	褐色の粒子、雲母片：微		
61	SE10	土師器 壺			(7.2)	外：回転ナデ 内：ナデ 底：花弁状圧痕	外：にぶい橙 内：橙	褐色、暗褐色の粒子：微		
62	SE10	土師器 壺			(7.6)	外：回転ナデ 内：風化にて不明 底：花弁状圧痕	外：浅黄緑 内：橙	褐色、白色の粒子：微		
63	SE10上	上部(内周) 壺			(7.4)	外：回転ナデ 内：ミガキ 底：ナデ	外：橙 内：黒	褐色、透明の粒子：微		

出土土器観察表 (4)

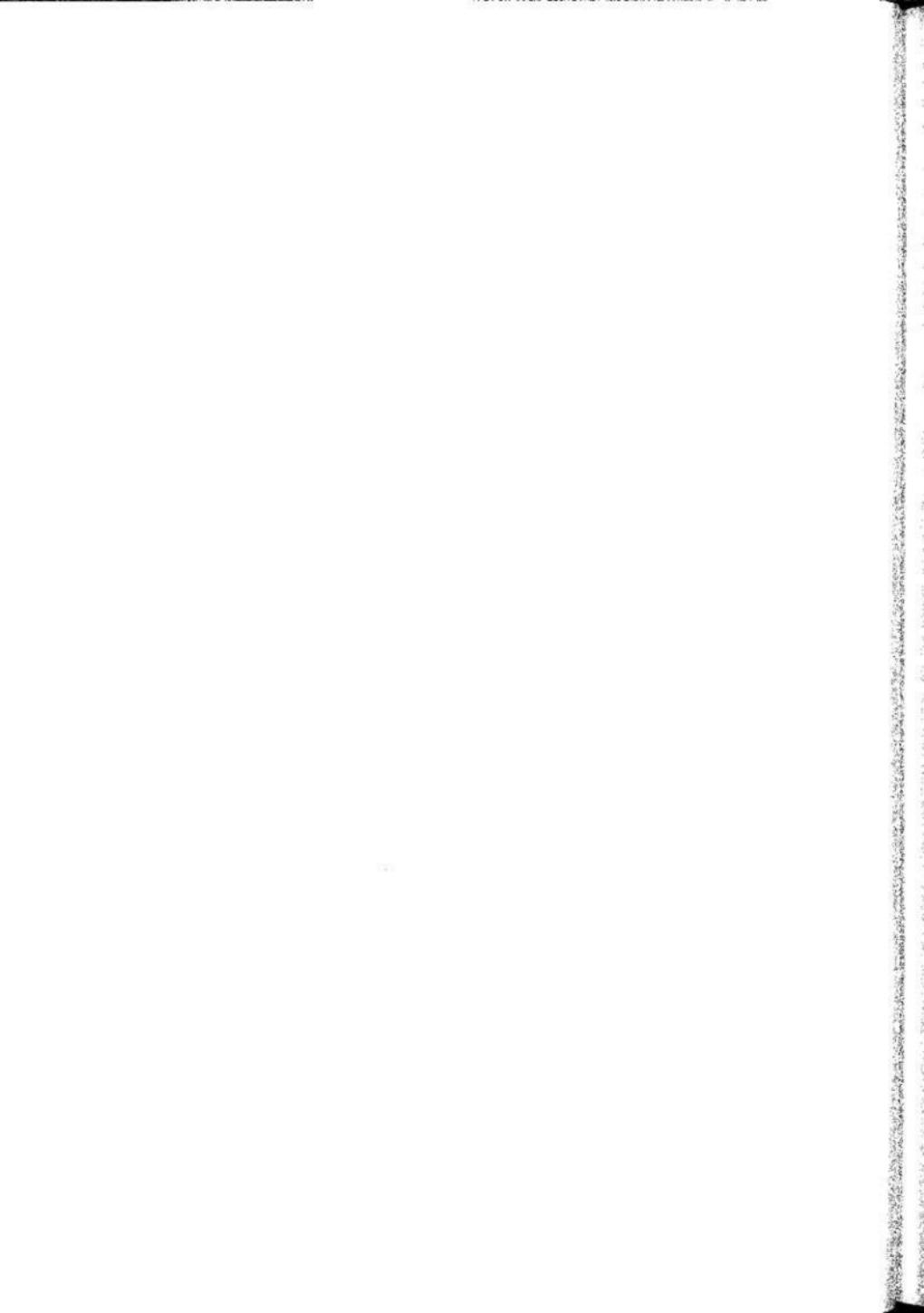
遺物 番号	遺物 名	種別	法量 (cm)			溝状	色調	胎土	備考	写真
			口径	器高	底径					
64	SE10	土師器 环				外: 回転ナデ 内: ナデ 底: ハラ切り	外: 橙 内: 棕	褐色、黒色、透明の 粒子: 中		
65	SE10 上	土師器 环				外: 回転ナデ 内: 回転ナデ 底: ハラ削り	外: 橙 内: 棕			
66	SE10	土師器 环	13.6	4.5	4.2	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ 底: ハラ	外: 橙 内: 棕	褐色の粒子: 多 黒色の粒子: 簡		
67	SE10	土師器 环	13.6	4.8	5.3	外: 回転ナデ 内: 風化にて不明 底: ハラ削り	外: 橙 内: 棕 赤棕	白色、灰色の粒子: 微		
68	SE10	土師器 环			(5.8)	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ 底: ハラ切り	外: にぶい棕 内: 棕	褐色、黒色、白色、 透明の粒子: 中		
69	SE10	土師器 环			(6.5)	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ 底: ハラ切り	外: 浅黄棕 内: 浅黄棕 棕	透明、白色、赤褐色 の粒子: 微		
70	SE10	土師器 环			(6.2)	外: 風化にて不明 内: 風化にて不明 底: ハラ切り→ナデ	外: 棕 内: 棕	暗赤褐色の粒子: 微		
71	SE10	土師器 环			(6.4)	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ 底: ハラ削り	外: 黒褐 にぶい棕 内: 浅黄棕	赤褐色の粒子: 簡		
72	SE10	土師器 环			6.1	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ 底: ハラ削り	外: 浅黄棕 内: 浅黄棕	茶褐色の粒子: 簇		
73	SE10	土師器 环			(6.6)	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ 底: ハラ切り	外: にぶい黄棕 内: にぶい黄棕	透明、白色、黒色、 褐色の粒子: 簇		
74	SE10	土師器 环			6.5	外: 黑褐にて不明 内: 風化にて不明 底: ハラ	外: 黄棕 にぶい黄 内: 棕 棕	白色、灰色の粒子: 微		
75	SE10	土師器 壺			(23.6)	外: 風化にて不明 内: 風化にて不明	外: 棕 内: 棕	透明、白色、褐色の 粒子: 中		
76	SE10	土師器 壺				外: 回転ナデ 内: 風化にて不明	外: 浅黄棕 内: 浅黄棕	褐色の粒子、角閃石: 微		
77	SE10	土師器 壺				外: 楊ナデ 内: ナデ	外: 棕 内: 棕	透明、白色、黒色、 暗褐、灰褐色の粒子: 中		
78	SE10	土師器 壺				外: 楊ナデ 内: 風化にて不明	外: 棕 内: 棕	透明、白色、黒色、 暗褐、灰色、白色、 褐色の粒子: 中		
79	SE10 上	土師器 壺				外: 楊ナデ 内: 楊ナデ	外: 浅黄棕 内: 浅黄棕	茶褐、白色、黒色、 透明の粒子: 中		
80	SE10 上	土師器 壺				外: 楊ナデ 内: ナズリ	外: 棕 内: 棕	褐色の粒子: 微		
81	SE10 上	須恵器 壺または壺			13.6	外: 回転ナデ 内: 工具ナデ 底: ナデ	外: 灰黄 内: 黄灰	鐵錆な白色粒: 微		
82	SE10 上	須恵器 壺				外: 回転ナデ→タタ キ 内: 回転ナデ→あて 具	外: 灰、灰オーリーブ 内: 灰	灰色の粒子: 微	外面に自然錆	
83	SE10	土師器 器種不明			11.1	外: 刷毛目・ナデ 内: 指痕模・ナデ 底: ナデ	外: 棕 灰褐 内: にぶい棕	赤褐、黃褐、灰白の 粒子: 中		
84	SE11	土師器 环			(4.5)	外: 風化にて不明 内: 風化にて不明 底: ハラ切り	外: 棕 内: 棕	褐色、黒色、灰色の 粒子: 微		

出土土器観察表 (5)

遺物 番号	遺構名	種別 器種	法量(cm)			測定	色調	胎土	備考	写真
			口径	器高	底径					
85	SZ01	上部器 壺				外:横ナデ 内:横ナデ	外:黄橙 内:黄橙	黑色、灰色の粒子: 中		
86	VI層	弥生土器 壺		5.8		外:工具ナデ 内:指押ばし 底:ナデ	外:橙 内:黄い橙	暗赤褐色、黒色の粒 子:微		
87	VI層	弥生土器 壺				外:風化にて小剥 内:風化にて不明	外:橙	褐色、灰褐色の粒子: 中		
88	VI層	弥生土器 壺				外:横ナデ ナデ 内:風化にて不明	外:にぶい黄橙 内:にぶい黄橙	黑色、灰色、透明の 粒子:中		
89	IVb・c	弥生土器 壺		6.8		外:ケズリ 内:風化にて不明 底:工具ナデ	外:橙 内:浅黄橙	白色、墨色、灰色、 褐色、赤褐色の粒子: 微		
90	VI層	弥生土器 器形不明		4.8		外:風化にて不明 内:指押痕	外:にぶい橙 暗赤 内:にぶい橙 橙	透明、白色、灰色、 褐色の粒子:微		
91	IVb・c	弥生土器 壺		3.3		外:ナデ 内:風化にて不明 底:風化にて不明	外:浅黄橙 にぶい 内:浅黄橙 橙	黑色、灰色、褐色の 粒子:中		
92	IVb・c	弥生土器 壺				外:ナデ 内:ナデ	外:浅黄橙 内:浅黄橙	黑色、白色の粒子: 微	高环のへそ	
93	VI層	縦輪周器 壺			(4.2)	外:剥落のため不明 内:回転ナデ 底:剥落のため不明	外:剥落 内:オリーブ灰	灰色の粒子:微	底面にも跡あり 防長壺	
94	VI層	環底器 壺	12.5	4.3	6.55	外:回転ナデ 内:回転ナデ 底:ヘラ切り	外:灰 内:灰			
95	VI層	上部(外側) 壺			(8.0)	外:回転ナデ 内:ナデ 底:ヘラ切り	外:橙 内:にぶい橙	黑色、灰色、褐色の 粒子:微		
96	VI層	上部(内側) 壺			6.0	外:剥落ナデ 内:回転ナデ	外:橙 内:橙	赤褐色の粒子:微		
97	VI層	土師(外側) 壺			5.45	外:風化にて不明 内:風化にて不明 底:風化にて不明	外:橙 内:橙	灰色の粒子:微	内面にスス付着	
98	VI層	土師(外側) 壺			(6.7)	外:回転ナデ 内:風化にて不明 底:風化にて不明	外:橙 内:橙	暗褐色、黑色、白色、 透明の粒子:中		
99	VI層	土師器 壺				外:回転ナデ 内:回転ナデ	外:橙 内:橙	白色、褐色の粒子: 微		
100	VI層	土師器 壺	(12.7)	4.2	(6.2)	外:回転ナデ 内:回転ナデ 底:ヘラ切り	外:にぶい橙 赤褐色 内:にぶい橙 赤褐色	褐色の粒子:微		
101	VI層 SC01上 SC01F	土師器 壺	13.3	4.6	(4.0)	外:回転ナデ 内:回転ナデ 底:ヘラ切り	外:橙 内:橙	灰色、褐色、透明の 粒子:微		
102	VI層	土師器 壺			(17.4)	外:回転ナデ 内:回転ナデ	外:浅黄橙 内:浅黄橙	白色の粒子:微		
103	VI層 SE08上	土師器 壺			(6.3)	外:回転ナデ 内:ナデ 底:ヘラ切り	外:明赤褐 内:明赤褐	褐色、透明の粒子: 微		
104	VI層	上部(内側) 壺	(13.4)	3.8	6.5	外:回転ナデ 内:回転ナデ 底:ヘラ切り	外:橙 内:橙	暗褐色、褐色、黑色、 灰色、透明の粒子: 中		
105	VI層	上部器 壺			(5.2)	外:風化にて不明 内:風化にて不明 底:ヘラ切り	外:黄橙 橙 内:黄橙 橙	白色、褐色、灰色の 粒子:微		

出土土器観察表 (6)

遺物 番号	遺物名	特異 器具	法量 (cm)			調整	色調	胎上	備考	写真
			口径	器高	底径					
106	VI層	土師(陶器) 环		5.2		外: 回転ナデ 内: 回転ナデ 底: ヘラ切り	外: 棕 内: 棕	赤褐色の粒子: 種		
107	VI層	土師器 环		7.0		外: 回転ナデ 内: 回転ナデ 底: ヘラ切り	外: 浅黄橙 内: 浅黄棕	灰色、褐色、白色の 粒子: 微		
108	VI層	土師器 环		5.5		外: 回転ナデ 内: 回転ナデ 底: ヘラ切り	外: 棕 内: 棕	褐色、暗褐、透明の 粒子: 微		
109	VI層	土師 环		(6.0)		外: 風化にて不明 内: 風化にて不明 底: 風化にて不明	外: 浅黄棕 内: 浅黄棕	灰色、褐色、透明の 粒子: 微		
110	VI層	土師器 环		6.2		外: 風化にて不明 内: 風化にて不明 底: 風化にて不明	外: 棕 内: 棕	黑色、灰色、白色、 褐色、透明の粒子: 種		
111	VI層	土師器 环				外: 回転ナデ 内: 風化にて不明 底: ヘラ切り	外: 浅黄棕 内: 浅黄棕	黑色の粒子: 微		
112	VI層	土師(外環) 环		6.7		外: 回転ナデ 内: 指揮圧痕 底: ヘラ切り	外: に赤い棕 黒褐 内: 浅黄棕	白色の粒子: 少		
113	VI層	土師器 环		(4.4)		外: 風化にて不明 内: ナデ 底: 風化にて不明	外: 棕 内: 棕	灰色、暗褐、透明の 粒子: 中		
114	VI層	土師器 环		6.7		外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	外: 棕 内: 棕	白色の粒子: 微		
115	IV b・c 層	白磁器 碗	(13.4)	5.5	4.3	外: 内:	外: 灰白地に透明釉 内: 灰白地に透明釉		見込み、蓋付に輪は ぎ(見込みは蛇の目)	
116	VI層	土師器 甕				外: 棕ナデ 内: 棕ナデ→ケズリ	外: 棕 に赤い黄棕 内: に赤い黄棕	赤褐、透明の粒子: 微		
117	VI層	土師器 甕				外: 棕ナデ→工具ナ デ 内: 指揮さえ	外: に赤い黄棕 内: に赤い黄棕	角閃石、透明、褐色、 白色、灰色の粒子: 微		
118	IV b・c 層	土師器 トチン		1.35	(7.0)	外: 四枚ナデ	外: 棕 褐灰	透明の粒子: 微		
						内: ナデ	内: 棕 褐灰			





図版1 構第2遺跡空中写真2（西から）



図版2 構第2遺跡空中写真3（東から）



図版3 櫛第2遺跡近景（南から）



図版4 櫛第2遺跡近景（東から）



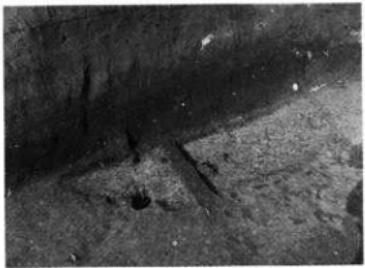
図版5 北部検出状況1



図版6 北部検出状況2



图版7 SA01検出状況



图版8 SA01土層断面



图版9 SB01、02検出状況



图版10 SB01、02完掘状況



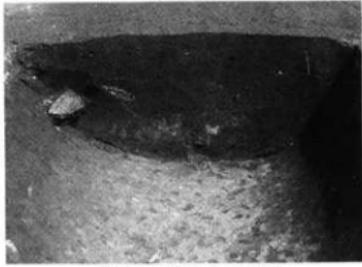
图版11 SB03,04検出状況



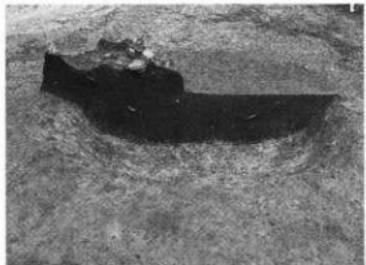
图版12 SB03、04完掘状況



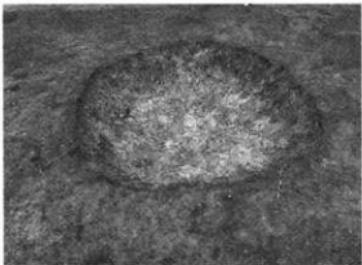
图版13 SE01完掘状況



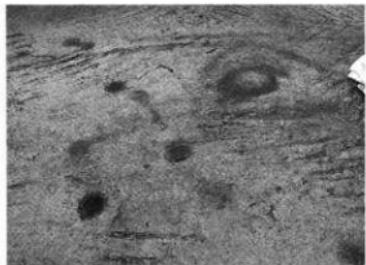
图版14 SE01土層断面



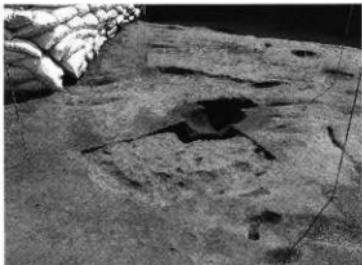
図版15 SC01土層断面



図版16 SC01完掘状況



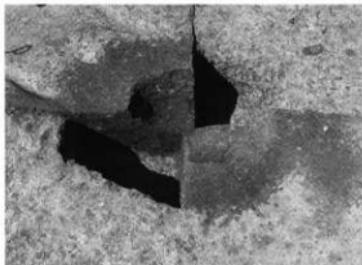
図版17 SZ01 (SB01,02)検出状況



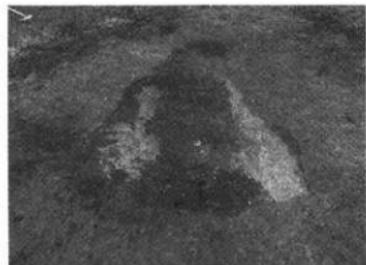
図版18 SZ01調査状況



図版19 SZ01半裁状況 1



図版20 SZ01半裁状況 2



図版21 SZ02検出状況



図版22 SZ02完掘状況



図版23 南部遺構検出状況1



図版24 南部遺構検出状況2



図版25 SA05、06完掘状況



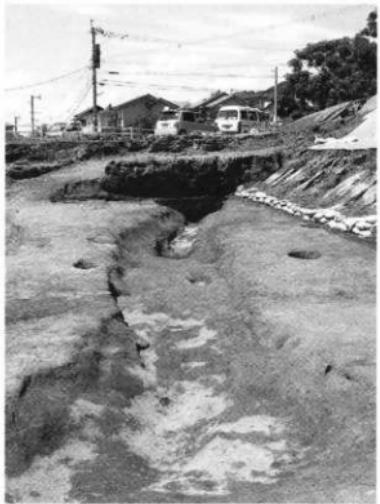
図版26 SE08調査状況



図版27 SE08完掘状況1



図版28 SE08完掘状況2  
(背後は椿1号墳)



図版29 SE10完掘状況 1



図版30 SE10完掘状況 2



図版31 SE10完掘状況 3



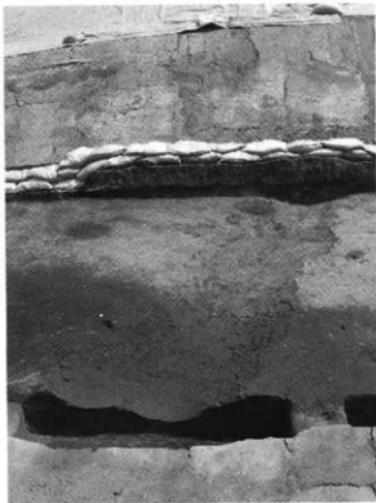
図版32 SE10内土築器出土状況



図版33 SE12完掘状況



図版34 SE09完掘状況



図版35 SE13完掘状況



図版36 調査風景



調査に参加された作業員の皆様



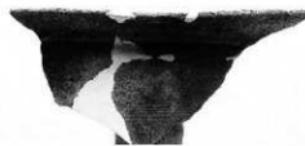
図版37 SA01出土土器(第6図3)



図版38 SC01出土土器 (第11図4)



図版39 SC01出土土器(第11図5)



図版40 SC01出土土器 (第11図8)



図版41 SC01出土土器(第11図8)



図版42 SE01出土土器(第12図10)



図版43 SE08出土土器 (第13図22)



図版44 SE08出土土器(第13図24)



図版45 SE08出土土器 (第13図27)



図版46 SE08出土土器 (第14図29)



图版47 SE08出土土器（第14图32）



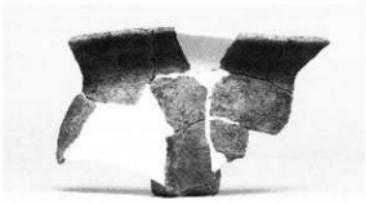
图版48 SE08出土土器（第14图33）



图版49 SE08出土土器（第14图34）



图版50 SE08出土土器（第14图38）



图版51 SE08出土土器（第14图52）



图版52 SE08出土土器（第14图54）



图版53 SE08出土土器（第14图55）



图版54 SE08出土土器（第15图59）



图版55 SE08出土土器（第15图59）



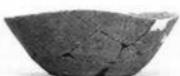
图版56 SE10出土土器（第16图64）



図版57 SE10出土土器（第16図65）



図版58 SE10出土土器(第16図65)



図版59 SE10出土土器（第16図67）



図版60 SE10出土土器（第16図72）



図版61 包含層出土土器（第20図86上）



図版62 包含層出土土器（第20図86下）



図版63 SE10出土土器（第17図83）



図版64 包含層出土土器（第17図89）



図版65 包含層出土土器（第20図90）



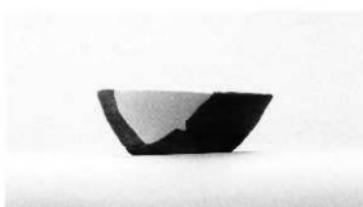
図版66 包含層出土土器（第20図91）



図版67 包含層出土土器（第20図94）



図版68 包含層出土土器（第20図95）



図版69 包含層出土土器（第20図100）



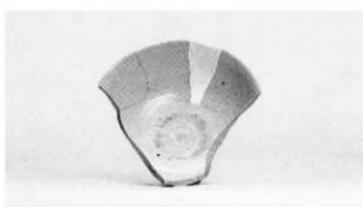
図版70 包含層出土土器（第20図101）



図版71 包含層出土土器（第20図104）



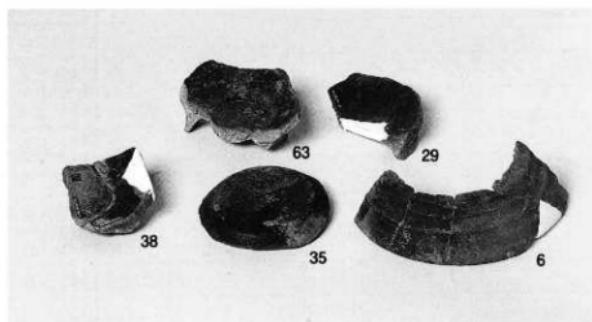
図版72 包含層出土土器（第20図115）



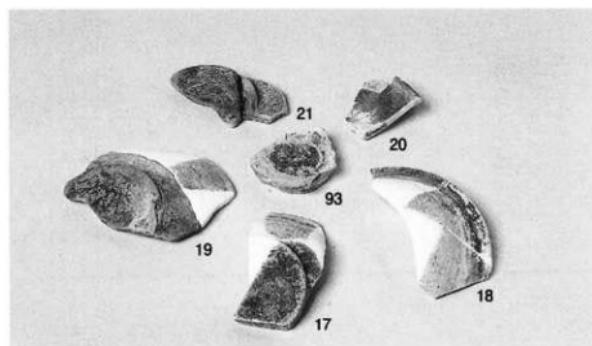
図版73 包含層出土土器（第20図115）



図版74 包含層出土土器（格子目タタキを有する土師器）



図版75 黒色土器



図版76 緑釉陶器



図版77 放射状ケズリを有する底部



# 報告書抄録

ふりがな	あおきだいせいせき					
書名	梶第2遺跡					
副書名	地域自治施設建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書					
卷次						
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書					
シリーズ番号	第66集					
編集者名	金丸武司					
発行機関	宮崎市教育委員会					
所在地	〒880-0805 宮崎市橋通1丁目14番20号					
発行年月日	2008年3月					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積
あおきだいせいせき 梶 第2遺跡	みやざきけん 宮崎県 宮崎市 上りきりょう 吉村町 甲317-1	45201		31° 55' 31" 付近	131° 26' 41" 付近 20060519 20060826	1,360m <sup>2</sup>
調査原因	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
地域自治施設建設	散布地	弥生時代 古墳時代 古代	竪穴建物 掘立柱建物 土坑 溝状遺構 不明遺構	土師器 須恵器 黒色土器 綠釉陶器 石器		

宮崎市文化財調査報告書 第66集

**樟第2遺跡**

地域自治区棟事務所建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

2008年3月

発行 宮崎市教育委員会